

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉  
高校版  
2018  
Volume 2

6月

# VIEW21

## ギモンはチカラになる

特集

### 4つの視点で 読み解く 次期学習指導要領

改革事例から導く!

「学校教育デザイン」を描く道標

京都府・京都市立京都工学院高校

主体的・対話的で深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

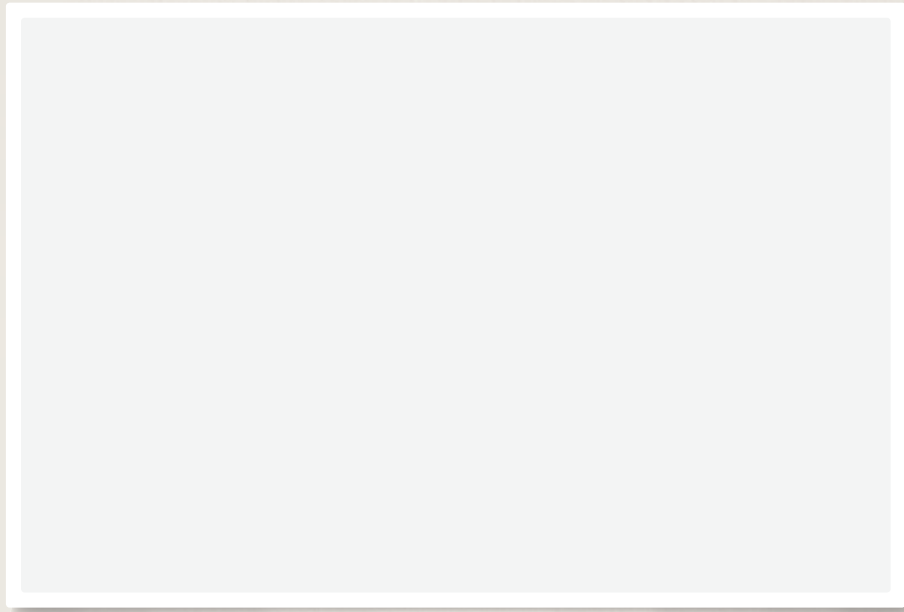
政治・経済 北海道倶知安高校 守田英樹

化学 岩手県立盛岡第三高校 円井哲志

指導変革の軌跡

新潟県・新潟市立高志中等教育学校

富山県・私立高岡向陵高校



## 相手を慮るクラスに

**先生** 2年次の新しいクラスになって半月が経ちましたが、みんなどう？ 人文・音楽・美術の3系列の生徒が1つのクラスを形づくるのは、今年度初の試みです。

**生徒** 系列が違うと同じクラスでも授業が異なるから、話す機会がなかなかない人もいて……。昨日行ったクラスづくりのためのシアターゲームは、みんなが仲よくなれるチャンスだと思って、クラス一同頑張りました。

**生徒** どのゲームも盛り上がったけれど、シャトルを投げ渡すゲームでは、名前が呼ばれずに自分に渡されると思わず落としてしまったり、誰に渡せばよいか分からずに戸惑ったりした人もいました。その経験から声をかけ合う大切さを学びました。

**生徒** 私もそう思った！ だからまず、朝、挨拶する時に名前を呼んでから「おはよう」って言おうと思います。

**生徒** 私は、昼食を1人で食べている子に声をかけるようにしています。1回一緒に食べれば、向こうから声をかけやすくなるだろうし、私ではなくても気の合う友だちが見つかるきっかけになると思って。

**先生** 自分とは合わないと思う人がいても、相手を慮りながらコミュニケーションを取ることが、集団生

活では大切です。先生がうれしかったのは、ゲーム後に「掃除をしてから、机と椅子をしまおう」と全員で掃除を始めたことです。掃除当番がとても助かったと思います。3年次ではクラス替えがなく、卒業までこのメンバーで過ごすのだから、昨日のように自分たちで考えて行動できるクラスになることを期待していますよ。

**生徒** これから学校祭、体育祭と続くけど、人文・音楽・美術の各系列がそれぞれ強みを発揮して、力を合わせて、優勝をねらっていきます！

**先生** 社会では、周囲と協力して物事を進めることが大切になります。勉強だけでなく、そうしたこともこのクラスの取り組みを通して学んでほしいと思います。

**生徒** 先生が担任だった1年次のクラスで、普段あまり褒めない先生が、大きな行事の後によかったことを具体的に挙げて「みんな、よく頑張りました」と言ってくれた時、私たちの努力を見てくれていたんだと感動しました。このクラスもそうなれるよう頑張ろうね。

**生徒** そうだ！ 1年後に昨日と同じゲームをやろうよ。

**先生** いいね！ このクラスがどんなふうになっているか、今から楽しみです。

**新野佐千枝先生** 教職歴33年。同校に赴任して20年目。2年次担任。生徒指導部。前進路指導部長。

**北海道札幌厚別高校** 全日制／総合学科(人文・数理・音楽・美術系列)／共学／1年次・3年次各約280人、2年次約320人／2018年度入試合格実績(現浪計)国公立大は、北海道教育大などに14人が合格。私立大は、北星学園大などに延べ167人が合格。

2 特集

# 4つの視点で読み解く 次期学習指導要領

- 4 改訂のねらい  
「何ができるようになるか」という観点で授業の再構成を図る  
文部科学省 初等中等教育局教育課程課 教育課程企画室 室長 白井 俊
- 6 読み解くための4つの視点  
現場の教師は、次期学習指導要領から何を感じ取ったのか
- 10 「探究」を通じて資質・能力を育む  
どの力を使って、何を探究するのかを、毎授業で提示し、学びの質を高める  
実践事例 広島県立広高校
- 16 主体性等の評価に向けて  
主体性等の評価の導入で求められる、生徒の変容を見取り、省察を促す力  
北海道札幌北高校 福士公一朗／兵庫県・私立灘中学校・高校 井上志音／  
岡山県立玉島高校 副校長 山崎淑加／  
大阪大学 高等教育・入試研究開発センター特任助教 井ノ上憲司／  
関西学院大学 高等教育推進センター専任講師 時任隼平
- 20 自校でできる読み解き研修会のススメ！  
次期学習指導要領を読み解く意義を伝え、対話的な研修を実施する

今月の表紙メッセージ

ギモンはチカラになる

◎ 2018年3月、高校の次期学習指導要領が公表されました。今回の改訂では、内容はもちろん、構成等も大きく変わっています。その「前文」で「教育課程の基準」と示されている通り、22年度以降の各校の教育課程の礎となるのが学習指導要領です。そのため、全教師が内容をしっかり理解し、授業や指導に落とし込む必要がありますが、より深い理解のためには、学習指導要領の内容をそのまま受け止めるのではなく、疑問に感じたり、違和感を持ったりする点はないか、意識することが重要ではないでしょうか。疑問は探究力を発揮させ、その先に深い理解が待っている……まさに次期学習指導要領で目指す学び方が、その読み解きにおいても求められているのだと思います。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木 崇

22 改革事例から導く！「学校教育デザイン」を描く道標

- 22 京都府・京都市立京都工学院高校  
課題解決型学習を通して  
これからの工学系高校に求められる資質・能力を育む

24 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

- 24 政治・経済  
北海道倶知安高校 守田英樹  
自分で学び取った知識を基に考えを持ち、  
学び合いでそれを広げ、深めていく

- 28 化学  
岩手県立盛岡第三高校 円井哲志  
「なぜ」と尋ねる発問を積み重ね、自分の考えを持たせることで、  
科学的な思考力を養う

32 指導変革の軌跡

- 32 新潟県・新潟市立高志中等教育学校  
主体的な学習意欲の醸成  
知識の「活用」を重視した指導の「質」の改善で、  
学びを深める生徒を育成

- 36 富山県・私立高岡向陵高校  
学力向上・キャリア教育  
生徒の「やればできる」を学校全体で支援し、  
自己実現への意欲を醸成

40 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

全学年共通  
夏期課題一覧

44 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

- 44 桜美林大学 サービスラーニングの推進  
授業と地域貢献活動をともに学ぶ中で、  
問題解決能力を身につける

- 46 金沢工業大学 プロジェクトデザイン教育  
依頼者が求めることをチームで考え、  
解決策を提示する力を育成する

48 これからの会議・研修のあり方、つくり方

会議・研修の司会・進行役の  
先生方の質問に答えます！

50 VIEW'S REPORT

「地方創生イノベーションスクール 2030 第2期 (ISN2.0)  
キックオフ シンポジウム」開催  
第1期の成果と課題を共有し、  
地域や国を超えた探究学習の深化を図る

60 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「迷った時はGO！」  
愛媛県立松山北高校 大谷修一

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ベンダコ 執筆協力／中丸 満、二宮良太  
撮影協力／荒川 潤、川上一生、筒井岳彦、鍋坂樹伸

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

©Benesse Corporation 2018

# 4つの視点で読み解く 次期学習指導要領

2018年3月、文部科学省から高校の次期学習指導要領が公表された。今回の改訂では、過去の改訂と比べて大幅な変更がなされており、22年度の実施までに、自校の学校教育をデザインしていくためには、これまで以上にその内容を理解することが重要になる。では、どのような点に着目して、学習指導要領を読んでいけばよいのだろうか。今号では、現場の高校教師と実施したワークショップ型の読み解き会と本誌読者モニターへのアンケートで挙げた声を基に、その視点を整理。そして、それらの視点を踏まえ、学校現場にはどのような実践が求められるのかを、具体的な事例を通じて考えていく。

## 学習指導要領改訂のポイント（抜粋）

### ◎改訂の基本的な考え方

- 子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視。
- 現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成。
- 高等学校教育を含む初等中等教育改革、大学教育改革、大学入学者選抜改革の一体的な改革の中で実施される改訂。

### ◎知識の理解の質を高め、資質・能力を育む 「主体的・対話的で深い学び」

- 「何ができるようになるか」を明確化。
- すべての教科等を、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で再整理。
- 生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出すため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要。

### ◎各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立

- 「主体的・対話的で深い学び」の充実には、単元など数コマ程度の授業のまとまりの中で、習得・活用・探究のバランスを工夫することが必要。
- 学校全体として、教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立。

### ◎教科・科目構成の見直し

- 国語科における科目の再編、地理歴史科や公民科における科目の新設、共通教科「理数」の新設など、目指す資質・能力を踏まえつつ、教科・科目の構成を改善。

### ◎教育内容の主な改善事項

- 言語能力の確実な育成、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、道徳教育の充実、外国語教育の充実、職業教育の充実など。

\*文部科学省「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」を基に編集部で作成。

## 本号のテーマ

次期学習指導要領を読み解くための視点と、  
これからの指導のあり方を考える

## 1 学習指導要領改訂のねらいを押さえる

【P.4～5】

- ◎「コンテンツ」中心の教育から、「何ができるようになったか」という「コンピテンシー」重視の教育に転換を図る。
- ◎教科の本質である「見方・考え方」を働かせた、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善を行い、資質・能力の3つの柱を育む。



文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長

白井 俊

## 2 次期学習指導要領を読み解くための4つの視点をつかむ

【P.6～9】

現場の高校教師によるワークショップ型の読み解き会と、本誌読者モニターのアンケートで挙げた声を基に、次期学習指導要領の理解を深める視点を4つに整理

## 視点1

社会に開かれた  
教育課程

次期学習指導要領で実現を目指すすべての基盤となる考え方・理念であり、教師間でまずこの共通理解が必要。

## 視点2

資質・能力の  
3つの柱

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」をどのように育むのか。そのバランスや育成の進め方が重要に。

## 視点3

資質・能力を育成する  
探究

どのような学びが探究なのか、各教科の授業でどのように実践していくのか。教師間での共通理解が求められる。

## 視点4

## 学習評価

3つの観点での学習評価をどのように実現するか。特に、数値で測りきれない資質・能力の評価が課題になる。

## 3 4つの視点に基づいた指導のあり方を考える

「探究」を通じて資質・能力を育む実践事例 広島県立広高校 【P.10～15】

どの力を使って、何を探究するのかを、毎授業で提示し、学びの質を高める

主体性等の評価に向けて、その実現の鍵を高校・大学の両視点から探る 【P.16～19】

主体性等の評価の導入で求められる、生徒の変容を見取り、省察を促す力

(座談会参加者／左から順に)

大阪大学特任助教

井ノ上憲司

関西学院大学専任講師

時任隼平



北海道札幌北高校 福士公一朗

兵庫県・私立灘中学校・高校 井上志音

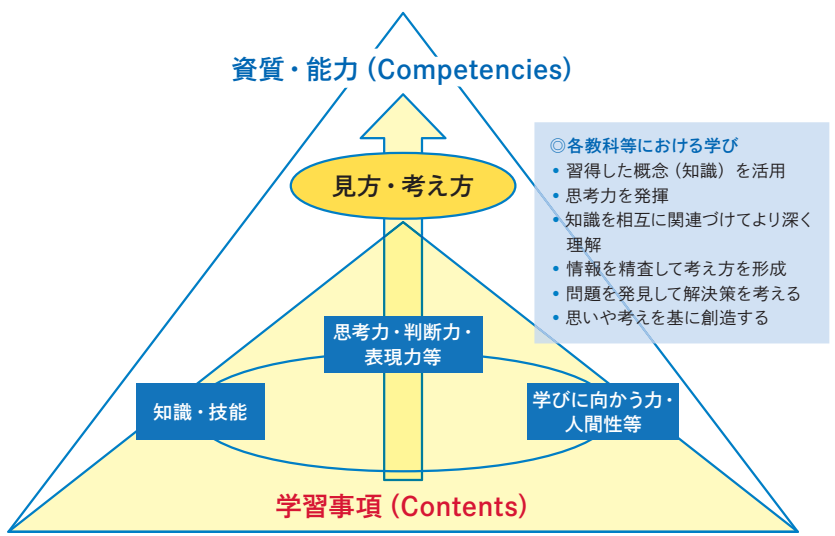
岡山県立玉島高校副校長 山崎淑加

ご活用ください！

自校でできる読み解き研修会 その実践の手順を紹介 【P.20～21】

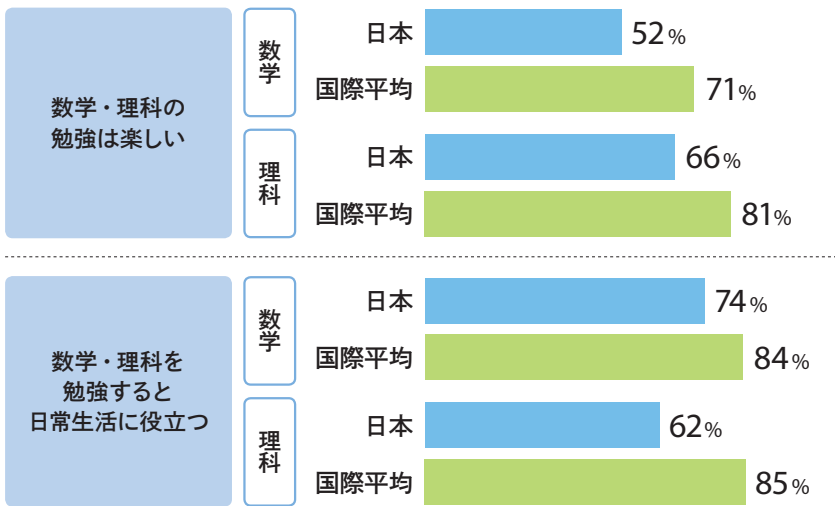


図1 「見方・考え方」の役割 (イメージ)



\*「地方創生イノベーションスクール 2030 第2期 (ISN2.0) キックオフシンポジウム」配布資料を基に編集部で作成

図2 数学・理科の学習に対する生徒の意識



注) 生徒質問紙調査 (対象: 中学校2年生、参加40か国・地域、約25万人) において、上記項目に「強く思う」「そう思う」と回答した生徒の割合の合計。  
\*「IEA国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS2015) 質問紙調査結果」を基に編集部で作成

そして、この3つの柱を育成するために次期学習指導要領に明記されたのが、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」です。しかしながら、そこに規定されている「主体的」「対話的」に比べて、「深い学び」はイメージしにくいとよく伺います。「深い学び」は、「習得・活用・探究」の学びの過程の中で、

各教科の特性に応じた「見方・考え方」を働かせることによって、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して自分なりの考えを持ちたりする学びの事です。一例を示しましょう。中学校の社会(地理的分野)の「見方・考え方」のイメージは、「社会的現象を、位置や空間的な広がりに着目して捉

え、地域の環境条件や地域間の結びつきなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連づけること」とあります。例えば、みかんの生産量が多いのは和歌山県、愛媛県、静岡県となりますが、それを知識として覚えるだけでなく、みかんの名産地に共通する地理的条件を見いだすことで、空間的な広がりを意識でき

ます。それが、みかんを栽培しやすい地域はどこか、地域の人々の暮らしや産業にどのように関係しているのかなど、地理的特徴と人間の営みの関係をより理解する能力を身につけることにつながります。つまり、「コンテンツ」と「コンピテンシー」を結びつけた指導が求められているのです(図1)。

学ぶ意義を考える上でも、「見方・考え方」が大切になります。生徒はしばしば、「これを学んで何になるのか」といった疑問を口にします。実際、IEAのTIMSS(国際数学・理科教育動向調査)2015の結果(図2)からは、「なぜ学ぶのか」「学ぶことに意味はあるのか」といった疑問を持つ子どもの姿が浮かんできます。勉強が楽しいと感じられない、役立つと思っていないのは、大きな問題です。

教科の本質である「見方・考え方」に光をあてることは、「なぜこの教科を学ぶのか」を考え直すきっかけにもなります。生徒に学ぶ意味を伝えた上で、「コンテンツ」と「コンピテンシー」をつないだ授業を各教科で組み立てていくことが、次期学習指導要領では求められます。

## 読み解くための 4つの視点

# 現場の教師は、次期学習指導要領から 何を感じ取ったのか

2022年度に向けて自校の教育活動をデザインするためには、そのよりどころとなる学習指導要領を読み解くことが必要不可欠だ。その際、どのような視点で読めば、学習指導要領の理解が深まるのだろうか。VIEW21編集部では、全国の高校教師によるワークショップ型の読み解き会を実施。次期学習指導要領を読み、それぞれの着目したのか話し合ってもらい、その共通点を整理した。

## 現場の声から 着目すべき点を見いだす

今号では、2018年3月に公表された高校の次期学習指導要領を読み解くために着眼すべき点を探るべく、全国の高校教師に集まってもらい、ワークショップ型の読み解き会を行った。読み解いたのは、「前文」と「第1章 総則（以下、総則）」そして、各自が担当する教科のページだ。

新たに設けられた「前文」には、学校教育への期待と目標、学習指導要領の役割・趣旨が明記されている。また、抜本的に位置づけが見直され

た「総則」は、次の7つの項目立てとなり、教育課程の役割や編成、全教科の指導方針などが示された。

- ① 高等学校教育の基本と教育課程の役割
- ② 教育課程の編成
- ③ 教育課程の実施と学習評価
- ④ 単位の修得及び卒業の認定
- ⑤ 生徒の発達の支援
- ⑥ 学校運営上の留意事項
- ⑦ 道徳教育に関する配慮事項

このように、「前文」「総則」には次期学習指導要領の根幹が示されていることから、その読み解きが自校の今後の教育のあり方や教育活動を左右すると言っても過言ではない。

各教科・科目のページにも、変更点がある。「目標」は、資質・能力

の3つの柱である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に沿って掲げられており、「内容」は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に分けて明記されている。

読み解き会は下記に示した流れで進められた。参加した教師の声を交えながら、その内容をまとめていく。



写真 読み解き会では、疑問点などを付箋に書き、グループ内で共有した。

## 読み解き会の流れ

①参加者は事前に学習指導要領に目を通しておいた。

前文  
総則

②【グループワーク】1グループ4人ずつの3グループに分かれ、疑問点、不明点を出し合った。そして、出し合った疑問点、不明点の解消をグループ内で行った。

③【全体発表】各グループの代表者が、自グループではどのような疑問点、不明点が出たのかを発表。グループ内で解消できなかった疑問点、不明点については、全体で協議した。

担当教科

④【グループワーク】担当教科に応じて「国語」「地理歴史・公民」「数学・理科」のグループに分かれ、担当教科の学習指導要領の「共感した点」「違和感を持った点」「疑問に思った点」を出し合った。

⑤【グループワーク】教科混合のグループにし、教科横断での共通点を探った。

⑥【振り返り】参加者個々に振り返りシートを記入。次期学習指導要領について、「ポイントとなる点とその理由、実現に向けての方策」「立ちはだかる課題とその要因、課題に取り組むための方策」をまとめ、各自全体に発表した。

「前文」「総則」を読み解く

「前文」と「総則」から、高校教育の理念と目標、そして指導の観点を理解する

「社会に開かれた教育課程」をどうすれば実現できるか

「前文」「総則」の中で、参加者がまず注目したのは、前文に書かれた「社会に開かれた教育課程」だ。

・前文（1ページ）  
（前略）よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、**社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。**

その一節について、参加者から次のような見解が示された。

「地域からは学校や生徒に様々な期待が寄せられ、それを教育目標に反映させる学校は多い。地域と学校は直結しており、既に教育課程は社会に開かれているのではないか」

「『社会に開かれた教育課程』の上

位概念にあるのは、実社会や実生活に役に立つ学びだ。そうした学びを通じて、生徒は身の回りの問題に関心を持ち、積極的にかかわるようになる。その状態を実現する教育課程を目指しているのだと思う」

また、「勤務校周辺では、経済状況の厳しさから家庭や地域の協力を得るのが難しい。企業も少ないため、どのように社会と連携を図ればよいのか」といった課題が挙げられたが、他の参加者から地域教育コーディネーターの活用が提案された。

以上のような見解や課題を踏まえ、「自校に求められる役割を考え、地域事情も考慮しながら、校内で『社会に開かれた教育課程』の共通理解を得ることが、その実現には必要不可欠だ」という考えが示された。

「社会で役立つ知識」を  
実感できる「探究」とは？

「実社会や実生活に役立つ学び」

に関連し、次に「探究」の話となった。

「学校での学びと社会との関連を実感させる教育活動は、全教科で行うことが望ましい。そうしなければ、生徒は自分に必要な学びとそうでない学びを分けてしまおう」といった考えが示された。すると、「知識・技能を習得させてからでなければ、活用や探究はできないと捉える教師もいるが……」という疑問が挙がった。それに対し、「総則」の記述を取り上げて、考えが述べられた。

・総則 第1款 2（1）（3ページ）  
（1）**基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。**（以下略）

「この一節は、学びの順序が示されているわけではないと思う。知識・技能の『習得』と『活用・探究』は並行して進むものであり、活用の場面で自分に足りない知識・技能に気づいて習得したものはしっかり定着するし、その後の学習行動にも主体性が表れる。それを理解すれば、授業の質の転換を図れるだろう」

また、探究の内容について、「『探

究』という『研究』がイメージされやすいが、『探究』に求められるのは、自分の生き方や考えを更新するための活動だ。その生徒に応じた活動でよいと考えれば、どの学校でも『探究』は行える」と指摘。すると、「幼稚園の参観で、園児が『どうすれば滑り台で速く滑れるか』という課題を立て、話し合いながら様々な方法を試しているのを見た。学齢を問わず課題解決型学習はできるのだと実感した」という体験談が紹介された。

さらに、探究の中・高の違いについて、次のような見解が挙げられた。

・高校「総合的な探究の時間」（641ページ）  
第1 目標 探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、**自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。**

・中学校「総合的な学習の時間」（159ページ）  
第1 目標 探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、**よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。**

「『総合的な探究の時間』の目標には『よりよく課題を発見し』とある

\*本文中に掲載している学習指導要領の抜粋は、2018年3月告示の「高等学校学習指導要領」、または2017年3月告示の「中学校学習指導要領」（いずれも文部科学省）。なお、黄色の網かけは編集部によるもの。

が、中学校の『総合的な学習の時間』の目標ではそれに言及されていない。高校では、自ら社会の課題を発見し、よりよい社会を築いていく態度を育むという趣旨が読み取れる」

## 観点別評価を行うために 何をすべきか

そして、話題は「学習評価」に移った。資質・能力の3つの柱に基づき、学習評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に再整理され、大学入試では学力の3要素を多面的・総合的に評価する入試への転換が図られようとしている。

「パフォーマンス課題では、評価方法を設定した上で授業づくりをしなければ、活動自体が目標にならないし、生徒の学びが深まらない」  
「定期考査などの総合的評価だけでなく、形成的評価も大切にしたい。生徒の形成的評価を積み重ねれば、生徒が自分の言葉で、自身の学びの成果を説明できるようになるだろう」  
それらの発言からは、学習評価を工夫しなければならぬといった課題意識がうかがえる。

## 担当教科を読み解く

# 資質・能力の3つの柱を バランスよく育むためにすべきことは

## 現行課程や中学校の課程と 見比べて読み解くことも必要

続いて、担当教科別のグループとなり、各教科のページを読み解いた。

### ◎国語科

国語科グループでは、目標の1つに掲げられた「我が国の言語文化の担い手」という一節に着目した。

・高校「国語」(24ページ)  
第1款 目標 (前略)  
(3)言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

それは、国語での学びを、人生を豊かにするために生かせるようになることではないかと解釈するとともに、「例えば、短歌を詠むなど、古文の学習を日常生活に生かせるような指導にも挑戦したい」といった授業における課題も挙げられた。  
さらに、中学校の学習指導要領と

見比べて、「中学校では『正確』『適切』で、高校では『的確』『効果的』という記述になっている。高校では、その場によりふさわしい言葉を選べるような指導が求められている」といった見解が示された。

### ・高校「国語」(24ページ)

第1款 目標 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、**国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力**を次のとおり育成することを旨とする。

### ・中学校「国語」(29ページ)

第1 目標 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、**国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力**を次のとおり育成することを旨とする。

### ◎地理歴史・公民科

地理歴史・公民科グループでは、学習指導要領のメッセージとして、「知識の理解を超えて、平和で民主的な社会の形成者に必要な資質・能力をつけてほしい」ということが伝わってくる」という見方を示した。

一方で、『歴史総合』を始めとする歴史科目では、今まで以上に指導

の軽重が求められる。その点を踏まえた指導計画をしっかりと作ることが必要だ」といった課題も共有された。

### ◎理科

理科全般について、「『観察、実験』という言葉が何度も登場していた。双方の目的を明確にしないと、ただの体験で終わってしまう」といった懸念が示された。また、生物では、「生物は暗記科目だと捉えている生徒が多いので、扱う用語が減るのはよい」といった声も上がり、探究学習の実践例として、「血液が固まる場合とそうでない場合があるのはなぜか」という多くの生徒が疑問に持つ問いを出したところ、自分の疑問を追究するため、生徒は意欲的に取り組み、その後の知識の定着度も高かった」といった取り組みが紹介された。

## 育てたい資質・能力から 単元計画を立てる

次に、教科混合グループとなり、自教科での話を共有。ここでは、教科横断の視点で資質・能力を育む授業の実現に向けた課題が出された。

「知識を関連づけて活用する学び、実生活や実社会とのつながりを実

感できる学びの実現、さらに、学習評価や大学入試との関連性も考え、と、問いを立てる難しさを感じる」

「育てたい資質・能力から各教科の単元計画や授業案をつくる重要性はよく認識できたが、単元計画の考え方がなかなか浸透しない」

一方、学校全体で資質・能力を育む体制づくりへの言及もあった。

「授業改善を管理職が主導してくればよいが、自分にできることとして、まず自ら授業改善を図り、成果を発信して賛同者を増やしていくといった努力の積み重ねが、やがて大きな変化につながるのだと思う」

「育成を目指す資質・能力の共通理解がカリキュラム・マネジメントにつながるが、学校・学年・教科で学習指導要領について話し合う時間をまだ取れていない。教師個々の取り組みに終わらせないよう、研修の場を意識的につくる必要がある」

参加者の振り返りでは、「グループワークが自身の多様な気づきの場になった」「同じ学習指導要領を読んでも、重要だと思う点や解釈が違っていた。校内の共通理解のためにも、今回のような読み解き会は必要だ」といった声が上がった。

## 次期学習指導要領を読む際に持っておきたい4つの視点

読み解き会の内容と読者モニターの声(\*)を踏まえ、  
次期学習指導要領を読む際に持っておきたい視点を次の4つに整理した。

### 視点 1 社会に開かれた教育課程

「社会に開かれた教育課程」は、学校教育目標、教育活動の内容、その具現化に向けたカリキュラム・マネジメントなど、学校教育のあらゆる面に通底している理念であり、その趣旨を深く理解し、学校内で共有することが重要となる。

読者モニターからは、「まず、学校が置かれている『地域』への理解を深めることが、学校が『社会』への意識を高めることにつながる」といった指摘もあり、自校にとっての「社会」を定義する必要もあるだろう。

### 視点 2 資質・能力の3つの柱

資質・能力の3つの柱の育成について、その指導の進め方が課題だと言える。読者モニターからは、三位一体で捉える回答が多かったが、「柱の優先順位は、生徒の発達段階や特性、学習内容によって変化すると考える。知識がなくて議論ができないのならば知識・技能の習得が優先になるが、他者との議論で疑問が生じ、主体的に知識・技能を習得することもある」といった見解もあった。また、資質・能力の育成は長期的視野が必要だが、教師も生徒もすぐに結果を求めがちである点も課題になるといった指摘もあった。

### 視点 3 資質・能力を育成する探究

生涯にわたって主体的に学び続ける態度を育むために、「探究」は重要だと言える。しかし、「探究」に対する教師間の理解はまちまちであり、まずは校内で共通理解を図ることが必要だ。

また、『探究』は各教科の学びをつなぐ重要な役割を担う。知識の習得と探究の往還をスムーズにできれば、大学で研究を行う際の土台になる」という読者モニターの声もあった。生徒の学びをどうデザインするかがポイントになりそうだ。

### 視点 4 学習評価

学習評価の実践にあたっては、数値で測り切れない力、中でも「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するかが課題だと言える。また、読者モニターからは、「生徒が自身の成長を教師とともに実感できるよう、ポートフォリオを充実させたい。しかし、すべての学びや活動を記録させようとする両者の負担が大きいため、どう効果的に行うかが考えどころだ」といった、生徒の自己評価の重要性を指摘するとともに、その実践上の課題を挙げる声が多かった。

\*『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2018年4月にウェブとファクスで実施。回答数は119）

次ページからは、4つの視点のうち、視点2と3を踏まえた実践のあり方について、具体的な事例を通じて考え、さらに、P.20からは、高校の教師と大学の研究者との座談会を通じて、視点4を深める。

「探究」を通じて  
資質・能力を育む

## 実践事例●広島県立広島高校

# どの力を使って、何を探究するのかを、 毎授業で提示し、学びの質を高める

広島県立広島高校では、広島県からの研究指定を受け、教科学習や「総合的な学習の時間」で課題発見・解決学習を展開している。育成を目指す16項目のコンピテンシーを定義し、授業シラバスには各単元で活用するコンピテンシーを明示。学校全体で資質・能力の育成を図っている。

### 取り組みの背景

## ユニバーサルデザインの考え を取り入れ、授業改善を推進

広島県南西部の呉市に位置する広島県立広島高校は、毎年約100人の国公立大学合格者を出す、地域の進学校だ。2015年度から、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト活用コアスクール」の指定を受け、資質・能力の育成を目指す授業づくりを研究している。その下地になっているのは、以前から進めてきた授業改善だ。

13年度、特別支援学校から着任した当時の校長の提案で、ユニバーサ

ルデザインに基づいた授業づくりが取り入れられた。例えば、授業中に生徒の気が散るのを防ぐため、掲示物は教室の後ろに貼ることにし、黒板の周りにあるのは時計だけにした。また、生徒が授業の全体像を把握し、今授業がどの段階まで進んでいるのかが一目で分かるよう、黒板の左端にその時間の学習目標と学習項目を書き出し、終わった項目に斜線を引くようにした。教務主任の上川康介先生は、そのねらいを次のように説明する。

「本校には多様な生徒が入学しています。そうした生徒が授業に集中できる環境を整えることは、すべて

の生徒にとってよいことだと考え、学校全体で取り組むことにしました」

14年度には、広島県立教育センターのサテライト講座を利用して、研究授業に関する手法を学び、自分の担当教科の教師と他教科の教師1人ずつの計2人の授業を参観し、指導の工夫を学び合う「相互授業観察」を始めた。教務部の大本順一先生はその意図をこう語る。

「本校では、例年5〜6人の教師が入れ替わり、新採の教師も毎年のように赴任します。新しく来た先生方に早く本校の指導スタイルに慣れしてほしいという思いから、他教科の

授業も含めて見てもらうことにしました。生徒の実態は担当教科の授業の様子だけではつかみ切れるものではないので、本校の赴任歴の長い教師にとっても、他教科の授業観察は効果的でした」

相互授業観察では、参観者自身が観察する生徒を1人決め、その生徒の発言や表情、教師とのかかわりなどを授業観察票に書き込みながら、指導のポイントをつかむ。そして、授業後の振り返り会では、参観者が生徒の変容を報告し合い、効果的だった指導について話し合うという方法にした。すると、初回から、生徒がさらに学びを深めるためにはど

### 広島県立広高校

◎校訓は「敬虔 自律 友愛」。文武両道を校是とし、学習と部活動の高い水準での両立を目指している。剣道部やハンドボール部、バスケットボール部、放送班などが全国大会に出場。2015年度から3年間、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」活用コアスクール」指定校。18年度、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校。

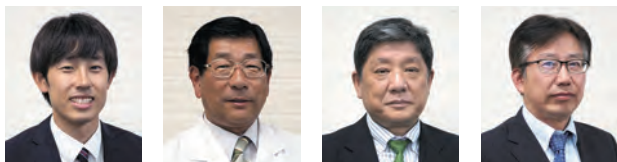
◎設立 1942（昭和17）年

◎形態 全日制・定時制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約200人（全日制）

◎2018年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、千葉大、大阪大、広島大、九州大、県立広島大、広島市立大などに102人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ400人が合格。

◎URL <http://www.hiro-hiroshima-ed.jp/zenichi/index.html>



広島県立広高校教頭  
**川中延晃** かわなか のぶあき  
教職歴32年。同校に赴任して1年目。

広島県立広高校  
**上川康介** かみかわ こうすけ  
教職歴34年。同校に赴任して8年目。教務主任。

広島県立広高校  
**大本順一** おおもと じゅんいち  
教職歴36年。同校に赴任して5年目。教務部。

広島県立広高校  
**森光智洋** もりみつ ともひろ  
教職歴6年。同校に赴任して2年目。教務部。課題発見・解決学習推進リーダー。

うすればよいかといった前向きな議論が活発にされたという。

同校がそうした授業改善を進める中、14年12月に広島県教育委員会が打ち出したのが「広島版『学びの変革』アクション・プラン」だ。同事業は、県内の全公立学校に対し、資質・能力（コンピテンシー）の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動として、課題発見・解決学習や異文化間協働活動を積極的に推進することを目的としている。

その研究指定を受けた同校は、校長・教頭・教務主任・中核教員・各教科代表等による「『学びの変革』プロジェクト」を設置。社会で求められるコンピテンシーを独自に定義し、それらの育成に向けて、各教科の授業や「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）で課題発見・解決学習を実践してきた。今回は、その中でも各教科の授業づくりに着目して見ていく。

#### 育成を目指す資質・能力の定義

#### コンピテンシーの16項目を 教育活動全体で育む

同校が育成を目指すコンピテン

シーは、知識（CK）、技能（CS）、態度（CA）を核となる要素とし、CSとCAは各8項目（計16項目）からなる（図1）。以前OECDが実施するテストに参加した経験から、そのキー・コンピテンシーを参考に、変革プロジェクトが定義した。上川先生は、定義されたコンピテンシーを初めて見た時をこう振り返る。

「担当科目の化学の授業を考えた時に、活用場面が浮かばなかったのが『②セッション』です。それは結論を求めない議論ということですが、化学においてはどのような議論になることなのか想像がつかまませんでした。ただ、1年間のどこかで、どのコンピテンシーも使う場面を設定したいと考えました」

コンピテンシーの育成場面について、大本先生は次のように説明する。「教科の特性に応じて、授業の進め方や生徒の学び方には違いがありますが、そこで、学校全体で、この16のコンピテンシーを育んでいけばよいと捉えています」

図1 広高校が定義したコンピテンシー

核となる「知識」Core Knowledge [CK] 思考の基礎となる各教科の「知識」			
核となる「技能」 Core Skill [CS] 情報の獲得や他者との意見交換に係る「技能」	合意形成系統 (ほかの人と話し合い、意見を交わすこと)	①ディスカッション ②セッション ③ペアワーク	
	調査検証系統 (課題について調べ、結論を導き出すこと)	④スタディースキル ⑤リサーチスキル ⑥スピーチスキル	
	思考表現系統 (論の正しさを考え、自ら正しく表現すること)	⑦ロジカルシンキング ⑧ライティング	
	核となる「態度」 Core Attitude [CA] 他者との意見交換に係る「態度」	協働系統 (ほかの人とともに活動する場合に必要なこと)	⑨協調性
			⑩柔軟性
			⑪適応力
			⑫忍耐力
			⑬回復力
⑭リーダーシップ			
⑮積極性			
⑯責任感			
統率系統 (ほかの人を率いて課題を解決する場合に必要なこと)			

\* 学校資料を基に編集部で作成

教科と「総合的な学習の時間」の両輪で徐々に高める

コンピテンシー育成に向けた授業構想は次の通りだ。

各教科では、活用すべきCK・CS・CAを示した上で授業を進め、単元や題材のまとまりでパフォーマンス課題に取り組ませる。そして、総合学習では、各教科の授業で獲得したコンピテンシーを活用しながら問題解決学習に取り組む(図2)。課題発見・解決学習推進リーダーの森光智洋先生は、次のように語る。「各教科の授業と総合学習の両輪を、第1学年かららせんの広げていくことで、徐々にコンピテンシーが高まることを期待しています。各教科の授業や総合学習の進め方は、基本的に3年間同じですが、コンピテンシーの高まりに応じて、課題の内容や問題解決の手法をレベルアップさせていきます」

なぜその力が必要なのか  
体験によって理解を深める

CS・CAについては、生徒にそ

れぞれの趣旨を理解させるため、第1学年1学期の総合学習で、各コンピテンシーの活用を一通り体験させる。例えば、「②セッション」は、結論を求めるものではなく、グループ内で意見をしっかりと出し合うことだとルールを説明した上で、実際にテーマを出してグループでセッションさせる。

「第1学年の1学期から授業でCSやCAを活用しつつ、総合学習でしっかり各

コンピテンシーを理解させる機会を設けています。コンピテンシーの趣旨が十分理解できれば、授業でも目的意識を持って活用できるようになるからです」(森光先生)

CAについては、外部団体によるワークショップを行う。ペアで褒め合う、話が途切れないように接続詞を使いながら会話をするとといった活動を通して、協調性や積極性などを

図2 コンピテンシー育成を図るための授業構想

学年	第1学年		第2学年		第3学年	
課題	解決課題「地域」		解決課題「日本」		解決課題「世界」	
場	授業	総合的な学習の時間	授業	総合的な学習の時間	授業	総合的な学習の時間
4月		CS・CAの習得	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
5月						
6月						
7月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
8月						
9月						
10月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
11月						
12月						
1月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
2月						
3月						

\*学校資料を基に編集部で作成

体得していく。

「普段はおとなしい生徒が、ワークショップの最後に講師からマイクを向けられてすぐに活動の感想を答えた姿に、こんなにも変わるものと驚きました。ワークショップ後の授業では、グループワークを行う際、すぐに役割分担が決まり、スムーズに活動するようになりました」(上川先生)

各教科の授業づくり

何をどのように学ぶのか  
生徒に明確に意識させる

各教科の授業では、課題発見・解決学習としてパフォーマンス課題を出し、コンピテンシーを活用して行う協働的学習を取り入れている。

◎授業シラバスの作成

教科のどの単元・題材で、どのコンピテンシーを活用・育成するのか、教師間で足並みをそろえるため、各学年で授業・教科ごとに作成する「授業シラバス」の「授業計画」の中で、授業の年間計画と各単元における主な到達目標(CK)、その単元で伸ばすCS・CAを明示した(図3)。

ワークショップ後の生徒へのアンケートでは、CAの「積極性」「適応力」「柔軟性」「協調性」を学べたと答えた生徒がそれぞれ6〜8割いた。「自分の殻を破って楽しむことがとても楽しく、コミュニケーションの方法も分かった」といった声もあり、自分の感覚や感情のみを考える「殻」を破り、他者と「つながる」必要性を理解できたことがうかがえた。

図3 授業シラバス 第3学年「物理」の例

月	学習内容	単元ごとの到達目標 (CK)	CS (技能) CA (態度)	評価の観点				教科書
				関	思	技	知	
第1学期課題考査								
4	気体の状態方程式 気体分子の熱運動 熱力学第1法則 気体の状態変化と熱・仕事	気体の分子運動と圧力との関係を定性的に考えようとする。 気体の圧力が生じる原因を把握し、気体に関する各法則を考察することができる。 気体の状態方程式を用いて、さまざまな条件における気体の状態を考察することができる。 断熱圧縮・膨張を利用し、断熱圧縮でのエネルギーのやりとりを理解し、気体に関する法則や気体の状態方程式を、さまざまな条件において適用することができる。	【CS】① 【CA】②、③、④、⑤	○	○	○	○	p.94 ~126
5	波の伝わり方 波の干渉と回折 波の反射と屈折 音波 ドップラー効果	波の基本的な特徴を理解し、正弦波の式を定性的に導出し、音が伝わるようにするに留意し、音波の反射・屈折・回折・干渉について考えようとする。 ホイヘンスの原理を用いて、平面波の反射、屈折を理解し、屈折のしくみを考え、音波の伝わる速さが媒質の密度に依存しないことから、ドップラー効果によって変化する波長や振動数を考える。	【CS】① 【CA】②、③、④、⑤	○	○	○	○	p.134 ~174
第1学期中間考査								

\*学校資料をそのまま掲載

授業シラバスは、生徒にも配布。生徒自身にも「CKを獲得・活用するために、どのようなCS・CAを用いるのか」を意識させることによって、目的を持って授業に臨めるようにしている。

さらに、毎回の授業では、その授業での到達目標のCKと、活用するCS・CAを、黒板の左上に提示する(図4)。ここでも、ユニバーサルデザインの考えに基づき、授業内で学習内容と習得の方法を教師と生徒が共有し、学習を進めやすくしている。

### 社会とつながりのある課題や思考を深める課題を出す

#### ◎ パフォーマンス課題の内容

パフォーマンス課題は、社会とのつながりを意識した「実の場」を設定したり、思考を深める問いを出したりして、単なる体験活動とならないようにしている。

「そうした課題は、活用する知識が蓄積されていなければ、思考が深まりません。パフォーマンス課題は毎回の授業で取り組ませるわけではなく、単元や題材のまとめで取り

組ませています」(上川先生)

パフォーマンス課題の具体例を紹介する。上川先生は「化学」の授業で、「無色透明の4種類の水溶液を識別する」という課題を出し、グループで取り組ませた。生徒にはやり方を一切示さず、試験管は何本使ってもよいとだけ伝えた。

「生徒たちは、樹形図を描いたり、対応表を作成したりと、いろいろな方法を試していました。途中で、私が『先生は試験管2本で分かったよ』と言うと、生徒は驚き、一層熱心に考え、話し合っていました」

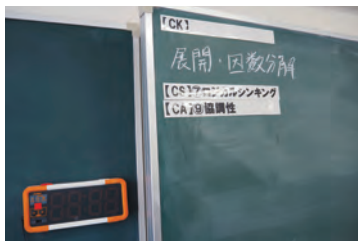
また、体育の授業では、「マット

運動を全員ができるようになる」という課題を出した。自分たちの演技を撮影し、うまくできた人できなかった人との演技を見比べ、その違いを見いだし、どうすれば全員ができるようになるのかを話し合っていたと言う。

どの教科でもよく見られるのが、「他者に説明する」という設定だ。

例えば、国語では、「こども銀行券で買いたい物をしようとした小学生に、紙幣の価値をどのように説明するか」という課題が出された。状況を明確に設定することで、生徒はよりリアルに考えられる。

図4 CK・CS・CAの提示 第1学年「数学」の例



黒板の左上に、その授業のCK(知識)、その獲得に向けて活用するCS(技能)、CA(態度)を提示し、生徒が常に目標を意識できるようにする。写真の授業は、中間考査に向け、展開と因数分解の演習にグループで取り組むという

内容であり、習得する知識として、展開・因数分解の方法、公式を挙げ、また、活用するコンピテンシーには、ロジカルシンキングと協調性が挙げられた。なお、ユニバーサルデザインの観点で学習環境を整えているため、黒板の横や上には、掲示物が一切ない。ただ、3年生の教室では掲示物が多いため、黒板の横にも貼ってもよいことに、授業中はスクリーンを下ろし、掲示物が見えないようにしている。

◎評価方法

パフォーマンス課題の評価は、ルーブリックを基に行う。ルーブリックは、課題そのものではなく、活用するコンピテンシーが本時の課題に取り組み中でどう変化すること、をねらうのかを5段階で示すようにした(図5)。到達目標は「5」だ。

また、生徒による自己評価も行う。17年度は、ノートに貼った自己評価表に毎時間チェックさせ、6月と12月にはコンピテンシーの活用度のアンケートを行い、総括的に振り返りをさせた。18年度は改めて自己評価の方法を見直すこととし、月1回の自己評価と、年2回のアンケートとした。

「日々の記録はつげなくても、内省できるように、授業の終了時に再度、授業の目標を復唱し、それを活用できたのかを振り返るよう、声かけをしています」(森光先生)

授業研究の工夫

簡易授業案で負担を軽くしつつ、中身の濃い互見授業に

各教科の授業づくりで大きな課題となったのは、パフォーマンス課

題の設定とそれに伴うルーブリックの作成だった。そこで、16年度からは研究授業の方法を改め、異なる教科の教師4〜5人で1グループとなり、相互に授業を観察し、教科を超えて共有できる点や生徒の状況から評価できる点、改善すべき点を議論するようにした。

具体的には、パフォーマンス課題づくりに必要な基礎知識の確認と、変革プロジェクトのメンバーによる模範授業で全体像をつかんでから、相互授業観察を実施。授業担当者の負担軽減も考慮した簡易指導案「STP」(図5)を用いて授業を見る視点を明確化し、異教科間でも議論が活性化するようにした。その授業観察を各教科内でも行い、全教科各1人が公開研究授業を実施した。

「異なる教科という多様な視点で議論することで、課題設定のポイントをつかめました。また、以前からの授業観察を通して前向きに議論を行う意識が教師間に定着していたので、発展的な意見が数多く出されたものも有意義でした」(大本先生)

16年度は「実の場」の設定とルーブリックづくりを、17年度は「思考」の深まりを問う課題の設定とルーブリック

図5 STP (Simple Teaching Plan) の例

教科	国語	科目	現代文B
指導者		指導教室	2年 組
指導日	平成29年	指導時間	9:38 - 10:28
単元名	評論「ホンモノのおカネの作り方」(岩井亮人)		
つけたい力	ことばの意味を定義する力		
活用するコンピテンシー	【核となる知識=Core Knowledge】 既得知識の先入観にとらわれることなく、必要な情報を文脈から読み出し整理・理解する。 【核となる技能=Core Skill】⑤ リサーチスキル 【核となる態度=Core Attitude】③ 柔軟性		
課題	あなたはスーパーマーケットの店員です。ある日ひとりの子どもが来店し、レジで駄菓子1つを出して、「この駄菓子で支払おうとした。あなたは「それは法外のお金」ではないから支払えないんだよ。」と伝えたところ、その子は、「この前お母さんは、スーパーの買物券で100円のお菓子を買ってくれたよ。」と答えた。ここであなたは子どもに「法外のお金」とは？」を説明しなくてはなりません。あなたならどのように説明しますか？評論「ホンモノのおカネの作り方」(岩井亮人)を参考にし、平たもわかるように説明してください。		
思考を深める問い	「ホンモノのおカネ」とはどのようなものだろうか？		
活用するコンピテンシーに対するルーブリック	5 資料から必要な情報を適正に選り出し、わかりやすく整理した上で記述できる。 4 資料から必要な情報を部分的に選り出し、わかりやすく整理した上で記述できる。 3 資料から必要な情報を部分的に選り出し、おおむね整理した上で記述できる。 2 資料から必要な情報を部分的に選り出し、整理しようとする上で記述できる。 1 資料から必要な情報を充分選り出しておらず、整理も不十分な上では記述はできない。		
	学習活動	指導	指導上の留意点
導入	「お金」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。	自身の生活を考え、ペーパーで考え、解決すべき課題を確認させる。	「日本銀行券」はそのものが価値を持つのか、思考を促す。
展開	課題解決のための教材を読み、「お金」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。「ホンモノのおカネ」とは何かを考える。	手がかりを確保し、個人内思考を促す。資料のまとめるワークシートに行わせる。	「本物」×「ホンモノ」がどのような意味を持つのか、ヒントを伝えながら思考を促す。
閉じ	各員まとめたものを発表し、4名1グループで「ホンモノのおカネ」とは何かを考えることばで説明させる。	ディスカッションにより、議事録資料にまとめる。完成したものが一つ一冊を全員に説明させる。	グループを活性化し、物言ひを促す。
まとめ	最終に「ホンモノのおカネ」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。	質疑応答「子ども」という言葉の知らない人物にどうなるか、考えてみるよう物語る。	

授業案を簡易な形式にし、教師の負担を軽減。特に見てほしい場面には、「★」をつけた。\*学校資料をそのまま掲載

リックの統一をテーマにし、課題設定のイメージと評価方法の統一が図られた。

「総合的な学習の時間」の内容

生徒が自ら課題を設定し、調べ、分析し、方策を考える

総合学習で行う課題解決学習では、第1学年は「地域(広地区・呉市・広島県)」、第2学年は「日本」、第3学年は「世界」の課題を発見し、調査・研究をして具体的な方策を提案する。基本的な流れは次の通り。まず、生徒個々にテーマに関する

疑問を挙げ、似た疑問を持つ生徒4〜5人でグループを組む。そして、グループで課題を1つ設定し、調査や分析を通して方策を考え、最終的にはポスターにまとめて、クラス内で発表する。

課題設定は生徒に委ねられており、担任はアドバイスする程度だ。これまで、急増している外国人観光客に対応するための英語の観光案内冊子を作成したグループや、子どもの安全を守るために地域の危険マップを作ったグループなど、自分たちの身の回りに引き寄せた課題が多かったと言う。

「市内にシャッター街が多い理由について、自分たちでポイントメントを取って商店街の会長に取材に行ったり、解決策の裏づけとなるデータを取ろうと他クラスに調査を行ったりと、生徒たちは想像以上にCSやCAを發揮しています(上川先生)」

これまで学級単位でのグループ編成だったが、さらに多様な他者と協働できるよう、18年度第1学年では学級混合のグループ編成を検討中だ。

成果・展望

疑問に思うことを主体的に探究しようとする生徒たち

以上のような取り組みの結果、教科の授業においても、探究心を持って主体的に学びに向かう生徒の姿が見られるようになったと、上川先生は手応えを語る。

「化学反応の解説で、以前は生徒から質問も出ず、すーっと進んでいたのが、今では『なぜこの場合は酸性なのですか』『この結合のここはなぜ違うのですか』など、立ち止まって考える生徒が出てきました」

大本先生も、生徒の変化を実感している。

「大学入試の出題頻度がそれほど高くない分野は、以前の生徒は関心があまりありませんでした。ところが、原子力発電についてのパフォーマンス課題を行った時、生徒から『原子力発電の問題について、先生はどう考えますか』と質問され、大いに議論が盛り上がりました。入試の出題頻度に関係なく、自分が関心を持ったことを追究する姿勢が育ってきていると感じています」

コンピテンシーの高まりは数値にも表れている。年2回行われる、生徒が行うコンピテンシー活用<sup>①</sup>の自己評価では、CS・CAとも、前期より後期、第1学年より第3学年の方が平均値が高く、コンピテンシーが着実に育まれていると言える(図6)。

コンピテンシーの見直しと自己評価の精度向上が課題

今後の課題の1つはCS・CAの見直しだと、森光先生は語る。

「3年間の運用を経て、数が多い、ほかの項目を入れたいといった意見も出てきています。ここでいまま一度見直し、生徒・教師ともに分かりやすいコンピテンシーにしたいと考え

ています」

評価方法の改善も課題の1つだ。生徒は力がついていけばそれでよいと捉える傾向があり、できたこと・できなかったことの双方を捉え、次にすべきことを自分で考えられる振り返りには至っていない。

「コンピテンシーのすべてを、高校時代に身につけなくてもよいと思っています。目指すのは、主体的に疑問を解決する力です。そのため、自己評価の精度を上げる指導を考える必要がありますし、授業に一層深みを出すために、私たち教師のスキルをさらに向上させていきたいと思えます」(上川先生)

今後の展望について、川中延晃<sup>のぶあき</sup>教頭はこう語る。

「中核教員を中心に、3年間、組織的に研究に取り組んできた成果が、生徒の姿に表れています。相互授業観察を通して学校全体で学び合うとともに、外部の力を借りながら進めてきたことも、成功の要因

図6 コンピテンシー活用<sup>①</sup>の自己評価(2017年度前期・後期)

	核となる技能 CS			核となる態度 CA	
	合意形成系統 (①ディスカッション、②セッション、③ペアワーク)	調査検証系統 (④スタディースキル、⑤リサーチスキル)	思考表現系統 (⑥スピーチスキル、⑦ロジカルシンキング、⑧ライティング)	協働系統 (⑨協調性、⑩柔軟性、⑪適応力、⑫忍耐力、⑬回復力)	統率系統 (⑭リーダーシップ、⑮積極性、⑯責任感)
*数値は前期/後期					
全学年平均値	4.36 / 4.50	4.05 / 4.28	4.03 / 4.25	4.32 / 4.43	4.04 / 4.17
第3学年平均値	4.55 / 4.73	4.25 / 4.47	4.28 / 4.45	4.51 / 4.69	4.21 / 4.42
第2学年平均値	4.31 / 4.53	3.90 / 4.28	3.86 / 4.28	4.26 / 4.38	3.95 / 4.19
第1学年平均値	4.21 / 4.25	3.99 / 4.09	3.94 / 4.00	4.20 / 4.22	3.95 / 3.90
全学年・全系統平均値	4.16 / 4.33				
第3学年・全系統平均値	4.36 / 4.55				
第2学年・全系統平均値	4.06 / 4.33				
第1学年・全系統平均値	4.06 / 4.09				

各コンピテンシーについて、5件法のルーブリックを設定。選んだ数値の平均値を算出。\*学校資料を基に編集部で作成

でしよう。教師の入れ替わりがある中、同じ成果を出すのは容易ではありませんが、継承するものと見直すものを見極め、取り組みをさらに進化させていきたいと思えます」

## 主体性等の 評価に向けて

# 主体性等の評価の導入で求められる、 生徒の変容を見取り、省察を促す力

次期学習指導要領では、学習評価の観点も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理されるが、そのうち「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するかが、高校現場の課題の1つとなっている。そしてそれは、高校教育とともに改革される大学入試も同様だ。そこで、大学入試における主体性等の評価の実現に向けて開発中の「JAPAN e-Portfolio」にかかわる大学の研究者と、高校現場の教師に、主体性等の評価について語り合ってもらった。

### JAPAN e-Portfolio とは

#### 生徒の活動に表れる言動で 主体性を評価

—— JAPAN e-Portfolio（以下、J e P）は、高校における主体性等の評価を考える上でも参考になるものだと思います。そこで、まずはJ e Pの開発チームのメンバーである関西学院大学の時任隼平専任講師から、J e Pの概要についてご説明をお願いします。

**時任** J e Pは、高校生活の活動を記録するeポートフォリオです。これまで大学の一般入試では、ペーパーテストで測る知識・技能の比重が大きかったのですが、今後は、高

北海道札幌北高校

**福士公一朗**

ふくし・こういちろう

教職歴33年。同校に赴任して6年目。教務部長。



校での様々な活動から受験生の主体性を評価するために、eポートフォリオの必要性が高まっていることから、文部科学省の委託事業として開発を進めています。2018年度が研究の最終年度で、現在、全国の約

兵庫県・私立灘中学校・高校

**井上志音**

いのうえ・しおん

教職歴13年。同校に赴任して6年目。



2900校の高校の先生と生徒に無料で活用いただいています。

本事業には、多くの高校の先生から、「そもそも主体性を評価できるのか」といった質問をいただきます。主体性は他の資質・能力に比べると

岡山県立玉島高校 副校長

**山崎淑加**

やまざき・よしか

教職歴26年。同校に赴任して4年目。



非常に抽象的なものであり、生徒が主体的な思考をしていても、それが言動に表れない限り、測ることはできません。そこで、J e Pでは、生徒の具体的な言動から、主体性があるかどうかを評価します。また、最

最終的な到達段階だけではなく、そこに至るまでのプロセスを見ることができるよう、生徒が自身の活動を振り返り、その過程や結果に対して何を考えたのかを記入する「リフレクション（省察）」の欄を設けました。

項目の作成前には、スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールの指定校の教師、大学教員、企業の人事担当者を対象としたアンケートを実施し、高校生・大学生・新入社員などのような行動に主体性を感じるのかを調査しました。高校現場の実感や企業の価値観とすり合わせて項目を設定しているのも、J e Pの特徴です。

**ポートフォリオの教育的効果**

**深い省察を促すには  
教師の働きかけも必要**

**山崎** J e Pは、学校生活のあらゆる活動が網羅されている点が良いと感じています（P.18図）。探究活動や学校行事、部活動など、教科学習以外の努力も評価されるようになっているので、生徒の学校生活全般への意欲が高まりそうです。高校現場でもうまく活用するとういと思えます。



長崎県立大学教育開発センター特任助教等を経て、2016年9月から現職。

**井ノ上憲司** いのうえ けんじ

大阪大学 高等教育・入試研究開発センター 特任助教

**井上** 私は、リフレクションが入っている点が良いと思います。これに「反省」の意味を取ると、失敗した時に行うものというイメージになりませんが、成功時も何が成功につながったのかを省察し、自分が次に何をすべきかが明らかになれば、活動への意欲が高まるのではないのでしょうか。  
**福士** 自分の活動を言語化することは、メタ認知を促す点でも効果的です。生徒に振り返る力をつけるために、何度もリフレクションをさせることが大切でしょう。  
**時任** 私は、先生方の指導があつてこそ、生徒は中身のある省察ができるようになると思っています。あ



文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）研究グループメンバー。

**時任隼平** ときとう じゅんぺい

関西学院大学 高等教育推進センター 専任講師

る高校では、1年生の「情報」の授業で自由に振り返りを書かせたとこる、「グループワークが難しかった」「画像の設定が難しかった」など、表面的な感想にとどまっていたそうです。生徒は初めから省察力を持っているわけではありません。先生方が教育的な意図を持ち、J e Pのリフレクションの項目を設定することで、深い省察に至るようになります。考えています。私自身、大学の授業で振り返りができない学生が多いと感じています。頭の中でいろいろ考えていても、それを言語化するにはある程度の訓練や経験が必要です。大学に入る前段階から、省察する力を

育成する必要があるでしょう。

**主体性の評価の意義**  
**見えない学力を可視化し、「教育の本質」に迫る**

**井上** 生徒の言動を通して主体性を見ることがありますが、高校が考える主体性と大学が考える主体性には、その認識に違いがあることもあります。各大学は入試において、J e Pの項目からどのように生徒の主体性を見ていくのでしょうか。  
**井ノ上** 各大学は、J e Pにある項目のすべてを見るのではなく、自学のアドミッション・ポリシーに依じて項目を取捨する形になると考えます。探究活動における主体性を重視するならば、その項目を参照するでしょうし、生徒会活動や部活動を見る場合もあるでしょう。そのため、大学が「こういう面で主体性のある生徒がほしい」といったことをアドミッション・ポリシーで明示する必要があります。があります。  
**福士** 大学入試でポートフォリオが使われるという点、「入試のために教育をしているわけではない」と抵抗感を持つ教師もいます。しかし、

## ☒ [JAPAN e-Portfolio]



JAPAN e-Portfolio のトップ画面 (https://jep.jp)

### ◎JAPAN e-Portfolio に記録できる「学びのデータ」例

探究活動	基本情報*1/参考文献/実験/研究室訪問 等
生徒会・委員会	基本情報*1/会議記録/業績の記録 等
学校行事	式典・行事/修学旅行・研修旅行/スポーツ大会・体育祭/文化祭・学園祭 等
部活動 (スポーツ活動)	基本情報*1/大会・試合の結果/代表への選抜履歴/段位の取得等/ベスト記録・通算記録 等
部活動 (文化芸術活動)	基本情報*1/コンクール・コンテスト・大会の結果/代表への選抜履歴/作品・成果物 等
留学・海外経験	留学/フィールドスタディ/交流イベント 等

\*1 活動内容や所属など基本的な情報を入力できるようになっている  
\*取材を基に編集部で作成

J e P の場合、入試利用の側面もさることながら、ポートフォリオを活用することで、これまで「見えない学力」と言われてきた部分が「見える化」されます。そこが重要だと思えます。ポートフォリオの項目を意識することで、教師の指導観や生徒を見る視点が変わり、「教育の本質」により迫ることができるのではないのでしょうか。ただ、保護者の中には、主体性を評価することが、生徒の人格や価値観をも評価するものと捉える方もいます。ポートフォリオの活用にあたっては、保護者への丁寧な説明も必要でしょう。

### 大学入試での活用

## 主体性を評価する観点を 大学は募集要項に明記

—— 大学が J e P の入力内容を入試の際にきちんと評価してくれるのかといった不安を抱く先生もいます。大学は、入試において J e P をどのように活用するのでしょうか。

**井ノ上** 各大学は、入試区分ごとに J e P のどの項目を見るのかを、募集要項に明記することになります。

大学によって見る項目は異なると考えられますから、全体として、多くの項目が入試で見られることになる

と推測しています。

**時任** J e P に限らず、大学が受験生に提出を求めたものは、評価の対象として利用することが入試の原則です。仮に見られない項目があったとしても、福士先生が言われた「教育の本質」を追求するという観点で、生徒が自身の高校3年間の軌跡を客観的に振り返る教育的効果は、小さくないと考えています。

**井上** 一般入試の調査書の扱いは変わるのでしょうか。

**井ノ上** 国立大学協会は20年以降の方針として、調査書が活用できる入試から順次導入することを求めています。これからデジタル調査書の普及が進めば、容易に情報を把握できるようにになるので、一般入試でも調査書が今まで以上に重視され、探究活動や学校行事など、多様な活動が評価対象になると考えられます。

### 主体性の捉え方

## 大切なのは、失敗を振り返り、 成功への道筋を探る過程

**山崎** 調査書の比重が高まると、生徒の資質・能力そのものではなく、教師の調査書作成能力が合否を左右

するのではないかとといった懸念もあります。生徒の多様な活動で主体性を評価することは、そうした懸念を払しょくする上で有効だと思います。今、高校現場では、ベテラン教師の大量退職により、若手の指導力向上が課題になっていますが、教師が生徒の変化や成長を見取る力がより重要になるのではないのでしょうか。

**井上** 生徒が確実に成果を上げている場合はよいですが、そうでない場合にどこまで書いてよいのか、判断に迷う場面が出てくると思います。

**井ノ上** 失敗をどのように捉えるのが重要になるでしょう。例えば、探究活動や部活動で目に見える成果が得られなかったとしても、生徒なりに頑張っており、その結果に至った理由が論理的に述べられていれば、十分評価に値すると思います。失敗を否定的に捉える必要はありません。大学での研究にも、失敗はあります。研究を進める上で大切なのは、なぜ失敗したのかを客観的に振り返り、そこから成功に導く道筋を組み立てる力です。失敗から立ち直る経験を積んできた生徒の方が、すんなり成功した生徒よりも、粘り強く頑張れる人物と評価されるかもしれませ



ん。調査書に生徒の失敗や否定的なことを書くのはためらわれるかもしれませんが、失敗後の言動を粘り強さや主体性を測る指標と位置づければ、生徒に対する見方も変わるのではないでしょうか。

**福士** 「J-e Pを見てみると、エビデンスばかり求められている気がする」と言う教師も少なくなく、挫折

しながらも頑張っている生徒は評価されないのではないかとといった不安を抱えています。確かに、研究には失敗がつきものです。大学が生徒の失敗を前向きに捉える意識を持つていることが分かり、安心しました。

**時任** コンクールに入賞した、学会誌に論文が掲載された、といった「結果」だけで評価するのは、主体性等の評価の趣旨に外れます。結果に生徒本人がどう向き合ったのか、活動について振り返りをしっかり行えたかどうかが重要です。生徒に省察を促し、思考したことを言語化できるようにするためには、高校の先生方が果たす役割は大きいと思います。

**高校の教師に求められること  
教師自身も省察し、  
課題に取り組み**

——主体性等の評価が求められる中、高校にはどのような取り組みが求められるのでしょうか。

**福士** ポートフォリオ作成に取り組むみ始めた本校において実感するのは、学校の方向性を無理にそるえなくともよいのではないかということです。考えに多少の違いがあっても、

主体性の育成や評価の大切さは、教師間で共感できる部分です。ポートフォリオは大事だからと、無理に足並みをそろえるのではなく、先生方を信頼し、それぞれの思いを認め合うことで、徐々に目線をそろえていけばよいのではないのでしょうか。

何より効果的なのは、生徒の変容を先生方に実感してもらうことです。本校では、文部科学省から「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた指導法の研究指定(\*)を受け、「学校全体をアクティブな学びの場にしよう」と、16年度から授業改善に取り組んできました。その結果、生徒がホワイトボードに自分の考えを書いて説明し合う光景が日常的に見られるようになりました。そうした生徒の変容が、「もっと生徒はできるのではないか」といった教師の意欲を高めていると感じます。

**山崎** 今後、ますます大切になるのは、アクティブ・ラーニングの実践を通して、授業を生徒の主体性を発揮させる場に変えることです。これまで教師には、生徒を正解に導くことが求められてきました。そのため、教師自身が、正解が1つではない問いに対応する力、生徒が自ら考えて

解を出せるように導く力を高める機会が少なかったと思います。今後は、大学での教員養成段階から、教師の資質・能力として、省察を促す力やファシリテーション力を伸ばすことが課題になるでしょう。

**井ノ上** 気をつけなければならぬのは、「先生が言うことは、すべて正しい」「先生は知識を教えてください存在だ」と、生徒に思わせてしまうことです。そうすると生徒は「先生の言うことを聞いていれば大丈夫」と捉え、言われたこと以外はしないといった状態になりかねません。大学にも、自分で研究課題を探せない、4年生になってもやりたいことが見つからないという学生がいます。「間違っても大丈夫」という雰囲気をつくり、生徒に主体的に考えさせる経験を通して、失敗を恐れず挑戦する意欲を育むことが大切でしょう。

**井上** 「発問」では教師に、生徒が持っている課題や問題を発見する力が求められます。そうした力は、教師が経験の中で身につけていくしかありません。今後は、学校現場で課題や問題を見つけ、それにどう対応していくかという、教師自身の省察力も問われるのではないのでしょうか。

\* 「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」

## 自校でできる 読み解き研修会の ススメ!

# 次期学習指導要領を読み解く意義を伝え、 対話的な研修を実施する

2018年3月に公表された高校の次期学習指導要領は、22年度からの教育・指導のよりどころとなる。各教師の理解のばらつきを防ぎ、学校全体でその本質をつかむための有効な手段として考えられるのが、校内研修の活用だ。ここでは、P.6～9で紹介したような、次期学習指導要領を対話的に読み解く校内研修を実践する際のポイントや進め方を解説する。

## 教育環境の変化を 教師集団が共通理解するために

次期学習指導要領で描かれる教育は、かつてない大きな変化である。特に、「何を知っているか」とどまらず、「何ができるようになるのか」にまで発展させる指導目的の転換は、授業の変化だけでなく、教科や学年、学校総体としての指導のあり方の変化を求めている。校内研修などを活用した教師集団としての目線合わせは喫緊の課題だ。P.6～9で紹介したような「次期学習指導要領」の読み解き研修は、以下のような流れで設計するとよいだろう。

### 次期学習指導要領を読み解く 校内研修のデザイン例

#### 事前準備

1～2週間前に通知

参加する教師に事前に  
「次期学習指導要領」に目を通してもらう

個人  
活動

校内研修に先立って、個々で次期学習指導要領の「前文」「総則」「(担当する)教科」の内容に目を通してもらう。

校内研修として1～2時間かけて実施

#### 校内研修

#### 1 「前文」「総則」を読み解く

グループ  
活動

疑問点・不明点をグループで語り合い、その解消を図る。解消できなかった疑問点・不明点は参加者全員で協議。

#### 2 「教科」を読み解く

グループ  
活動

まず、教科団ごとに共感した点や違和感・疑問を持った点を語り合った後、さらに教科をシャッフルし、教科横断での共通点や傾向などを語り合う。

#### 3 ワークシートで振り返る

個人  
活動

研修で得られた気づきとこれからの自分の課題、取り組むべきことをワークシートで言語化し、参加者間で研修の成果として共有する。

グループ  
活動

管理職、ミドルリーダーが  
研修の成果を1～2週間程度でまとめ、  
全教師に今後の工程を伝える

#### 事後活動

校内研修の結果を  
学校改革の工程に生かす

校内研修の結果見えてきた「次期学習指導要領」に向けての校内の課題を整理し、今後の学校改革のプロセスでどのように取り組んでいくのかを全教師に伝える。

## 校内研修のプログラム例

**事前準備** 出席者は事前に「前文」「総則」「(担当する)教科」を読んでおく。「前文」「総則」では疑問点や不明点を、「(担当する)教科」では共感した点・違和感を持った点・疑問点をそれぞれチェックし、研修に臨む。

- 用意するもの**
- ・ホワイトボード(または模造紙)
  - ・大判の付箋
  - ・ワークシート

### 1 「前文」「総則」を読み解く 目安30分間

- ① 4、5人のグループで疑問点や不明点を付箋やホワイトボードに書き出していく(10分間)
- ② グループで疑問点や不明点の解消を図る(10分間)
- ③ グループで解消できなかったことを全体で協議する(10分間)



### 2 「教科」を読み解く 目安1時間

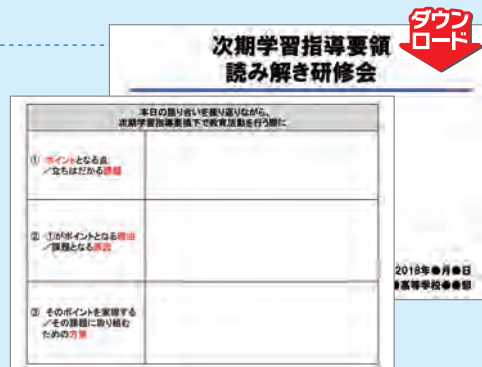
- ① 各教科団で学習指導要領の自教科の部分について共感した点・違和感を持った点・疑問点を挙げ、付箋やホワイトボードに書き出す(10分間)
- ② 書き出した付箋・ホワイトボードを各教科団内で確認し、気づいた点を出し合い、共通点や傾向を探る(5分間)
- ③ 各グループに1人の教師を残して、それ以外の教師は別のグループに移動し、教科混合になる。新しいグループの教師に対し、自教科で語り合った内容を、互いに共有する(20分間)
- ④ 教科を超えて共通点や傾向などを語り合う(25分間)
- ⑤ ホワイトボードなどに書き出した内容は、多くの教職員が目に見えるように一定期間校内に掲示する



### 3 ワークシートで振り返る 目安20分間

- ① 「今後の課題」「課題と考える理由」「課題への向き合い方」の3項目で、校内研修で得られた気づきと今後の自身が取り組むべきことを整理する(10分間)
- ② 4、5人のグループまたは各教科団内でワークシートの内容を1人ずつ発表し、共有する(10分間)

\* 振り返り用ワークシートのデータと、上記プログラムを進めるためのシナリオが書かれたスライドのデータを、ダウンロードしてご活用いただけます。



読み解き研修+αの意義

次の10年間に向けて  
語り合う文化を校内に育む

実際に数人の教師と次期学習指導要領の読み解きを行うと、「社会に開かれた教育課程とは、本校においては具体的にどのようなものを指すのか」「『基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得』とあるが、従来の授業と何が異なるのか」など、様々な疑問が立ち上がってくる。それらの「問い」は、校内ですぐに共通の答えが得られるものではなく、さらに学校の置かれている状況によって、その答えも変化していくものである。次期学習指導要領への読み解きを、これからの10年を見通して、「語り合う学校文化」の醸成のきっかけとしていただきたい。



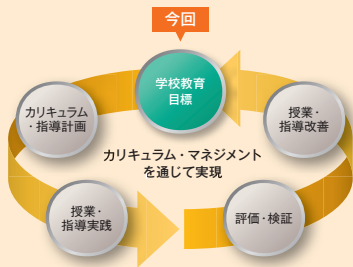
このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。

「HOME→教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。



CASE

改革事例



## 課題解決型学習を通して これからの工学系高校に求められる 資質・能力を育む

京都府・京都市立京都工学院高校

これからの工学系高校の使命から  
育成を目指す資質・能力を検討

京都府・京都市立京都工学院高校では、学科・専門の枠を超えたチームで、課題解決型学習に取り組む「プロジェクトゼミ」を、2016年の開校以来展開している。砂田浩彰校長はプロジェクトゼミの目標を、「特定分野に軸を据えつつ、異分野との融合を図り、新たな価値を創造する人材を育むこと」と説明する。

「学校教育目標と経済産業省の『社会人基礎力』をベースに、プロジェクトゼミで育成したい資質・能力を『かかわる力』『学ぶ力』『伝える力』『見つめる力』の4領域で設定していきました」（砂田校長）

異なる専門学科・分野の生徒がチームをつくり、それぞれの専門知識や技術を生かしながら課題に取り組む。

図1

### プロジェクトゼミで 育成を目指す資質・能力

領域	資質・能力
かかわる力	主体的に取り組む力・態度
	地域・連携先とかかわり貢献する力
	グループの中で協働する力・態度
学ぶ力	情報を集める力
	情報を選択し利用する力
	課題に対する解決能力
伝える力	グループで協議する力
	アイデアをかたちにする力
	個人の考えを他人に伝える力（文章・口頭・資料）
見つめる力	グループワークを円滑に進める力
	取り組みを振り返り、問題解決をよりよく改善する力
	グループワークでの個の生かし方を考える力
	今後に向けて活動を省察し、自己改善を図る力

プロジェクトゼミにおいて育成を目指す資質・能力を4領域で明確化し、3年間を通じて一貫性のある教育活動を行うため、同校では学年ごとにルーブリックを作成している。  
\*学校資料を基に編集部で作成

育成を目指す資質・能力の検討にあたっては、「工学系高校の存在価値とは何か」といった根本に立ち返り、丁寧に話し合いを重ねていったと有本淳一先生は振り返る。

「これからの社会・企業で求められる人材像や、高校時代に身につけてほしい人間性や生活習慣について話し合いながら、最終的には13の資質・能力を設定し（図1）、ルーブリックを作成して活動のアウトラインを固めていきました」（有本先生）

### 評価シートの運用によって 活動目的を周知徹底する

プロジェクトゼミは3学年を通して

て実施される。1年次は、前半でグループワークの手法を学び、後半で実社会の課題に取り組む。JAXA（宇宙航空研究開発機構）の協力を得て、17年度は「宇宙旅行時代の新しい宇宙服の開発」などのミッションにグループで取り組んだ。2年次からは「自然災害」「環境・エネルギー」「京のまち」などの7テーマから1つを選び、実際に課題として取り組む「アプローチャーマ」を、学科・分野の枠を超えたチームの中で生徒たち自身が決めていく。

プロジェクトゼミでは具体的な社会課題に取り組むが、教育活動としての目標は13の資質・能力の育成であることを、教師は折りに触れて生

\*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。



●3年生の政治・経済「現代の政治」における日本国憲法と民主主義の全2回の1回目。個人ワークを中心としつつ要所で学び合いを行い、日本国憲法制定までの道のりについて理解を深めた。(P.27に単元の指導計画を掲載)

守田先生がタイマーをセットし、「今日は12分間で」と言うと、生徒はすぐに教科書の該当ページを開き、プリント表面の空欄補充問題に取り組み始めた。守田先生はその間、後で行う要点解説のキーワードを板書し、机間巡視をして、迷っている生徒にヒントを出したり、質問に答えたりした。早く終わり、裏面の課題を始める生徒もいた。

自分で学び取った知識を基に  
考えを持ち、学び合いで  
それを広げ、深めていく

守田先生のアクティブ・ラーニング

知識を覚えさせる授業を転換し、  
考えて書く学習を取り入れる

守田英樹先生は、2017年度から、アクティブ・ラーニング(以下、AL)を導入し、ALや観点別評価に関する校内研修や外部研究会に参加し、自身の指導と評価を見直してきた。

「かつて、理想の社会科教員は、生徒が飽きないよう解説を工夫し、効率的に知識を蓄積させ



北海道倶知安高校

守田英樹 くっちゃん もりた・ひでき

教職歴26年。同校に赴任して19年目。  
地理歴史・公民科担当。進路指導部長。  
アクティブ・ラーニングの実践は2年目となる。

北海道倶知安高校

◎校訓は「進取・創造・自律」。2010年度に単位制に移行。70科目以上を設け、多様な進路に対応する。2015年度、キャリア教育「ドリカムプラン」が文部科学大臣賞を受賞。英語教育などで小中高連携も推進している。

◎設立 1922(大正11)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約140人

◎2018年度入試合格実績(現浪計)

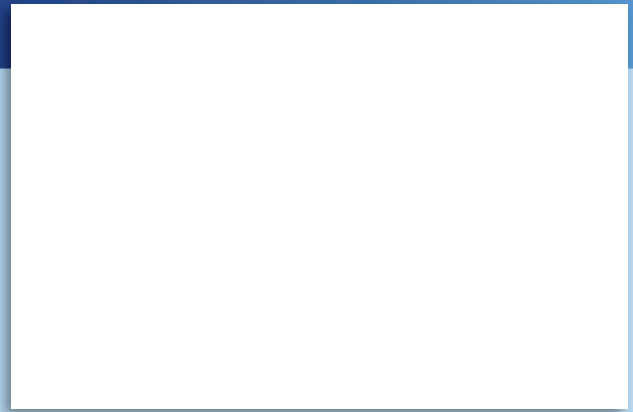
国公立大は、小樽商科大、帯広畜産大、北海道教育大、室蘭工業大、名寄市立大、国際教養大、長崎県立大などに15人が合格。私立大は、北海学園大、北海道医療大、日本大、文教大などに延べ47人が合格。

◎URL

<http://www.kutchan.hokkaido-c.ed.jp/>



守田先生が、約20分間にわたり、学習範囲の要点を解説した。教科書の内容をかみ砕きながら、「ここはどういうことだと思う？」などと、度々生徒に質問を投げかけるように説明した。生徒は解説を聞きながら、プリント表面に要点を書き込んだり、ノートに整理したり、空欄補充の答えを修正したりしていた。



アラームが鳴ると同時に、守田先生は「2人以上で何を書いたか確認して」と声をかけた。席が近くの生徒同士でプリントを突き合わせて、「こうだと思う。なぜかというところ……」「この問題は自信がないのだけれど……」と相談し合ったり、記述内容を確認し合ったりして、空所補充問題を完成させていった。

### 思考の活性化・深化への配慮

## 毎回、観点別の課題を設定し、指導と評価に活用

授業は、守田先生の自作プリントを使い、毎回決まった流れで進める。

まず約10分間で、教科書を見ながら表面の空欄補充に取り組む。以前は、守田先生が解説しながら取り組ませていたが、生徒にもっと教科書を読んでほしいという思いから、現在は、生徒自身に教科書を読ませて空欄を埋めさせ、重要ポイントを抜き出す力の育成を図っている。

ることだと考えていました。しかし、現実には、集中力が続かない生徒はいましたし、知識を蓄積できても、考えたり書いたりする力が十分に育っていないと感じることがありました」

小論文指導の時も、社会の動きに関心が低く、自分の考えを文章にするのが苦手な生徒が目立っていた。それも、覚える学習が中心で、考える習慣が身につけていないことが要因の1つだろうと考えた。それらの課題意識から、A Lと観点別評価を導入したが、授業を変えることへの不安は大きかったと言う。

「本校の周辺には予備校等がなく、大学進学希望者は学校での学習がすべてです。その点での失敗は許されません。そこで、これまで通り知識の定着は図りつつ、毎日少しずつ、考えて書く活動を取り入れることにしました」

そして、守田先生が約20分間で要点を解説する。

「生徒は概要をつかんでいるので、解説では、後半に出す課題を考えるための材料を提示しつつ、身近な事象に結びつけるなど、生徒の興味を喚起する発展的な内容にしています」

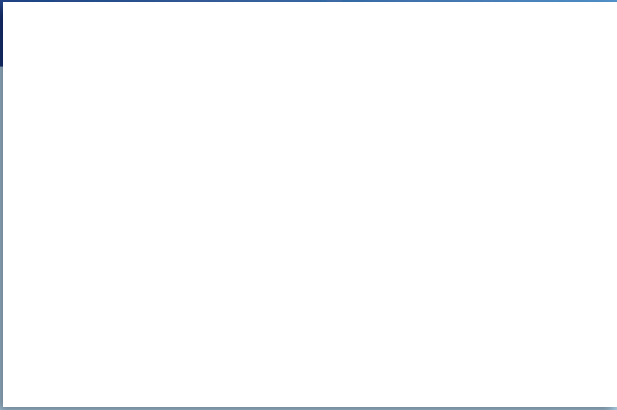
次に、個人で4つの課題に取り組む。課題は、それぞれ「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」に対応している。

問1では、資料を基に、比較的自由に気づいたことや感じたことを記述する。

「関心を高めるとともに、記述が苦手な生徒も書きやすい課題として、自信を持たせ、記述への抵抗感をなくすことがねらいです」

問2・3では、授業のテーマを掘り下げて考えたり、学習内容を整理したりして、記述する。この日の問2は、「大日本帝国憲法の特徴について、主権者、保障されている権利、統治機構という3つの観点から説明する」という問いで、生徒は教科書やプリントの表面を見ながら、2〜3行の文章にまとめた。そして、問4では、日本国憲法と大日本帝国憲法の制定の動機や主権者などを答えて、両者の比較表を完成させた。その後、生徒の学び合いを経て、守田先生はプリントを回収。プリントはすべてチェックし、観点別にA〜Cの3段階評価をつけて返却する。評価基準はあえて生徒に説明しない。

「生徒には、社会科では考え方や表現方法は1つではないと伝えていきます。生徒が『こう考えなくてはいけない』と型にはまらないよう、評価基



守田先生の「隣の人と確認し合って」という声かけを合図に、生徒同士の意見交換がスタート。それぞれ自分の考えの理由や根拠を説明し、よりよい表現に書き直す姿が見られた。最後に、学習意欲や内容理解についての自己評価を記入し、プリントを先生に提出して授業は終了した。



約10分間で、評価の4つの観点にそれぞれ対応した4つの課題に、教科書やプリント表面を参照しながら取り組んだ。守田先生は机間巡視をして、「問1は、難しく考えずに思ったことを書くとよいよ」「問2は、3つの条件に沿って書いてごらん」などとヒントを出した。書く分量に差は見られたが、どの生徒も積極的に書こうとする姿が見られた。

生は、生徒同士の学び合いを取り入れている。そうした課題への対応の1つとして、守田先生は、生徒同士の学び合いを取り入れている。その進み具合は、生徒によって差が見られた。2〜D3の生徒が混在するなど、学力差が大きいことが課題だ。この日の授業でも、プリントの進み具合は、生徒によって差が見られた。

場づくりへの配慮

質問しやすくなるよう声をかけ、多様な学力層の学び合いを促す

準は示さずに、自由に考え、表現させています」その結果、プリントの返却後、B評価の生徒はA評価のプリントを見せてもらい、どうすればよい評価となるかを自分なりに考え、工夫するようになったと言った。

また、新憲法の政府草案に対する世論調査の結果を見て気づいたことを記述する問1について、守田先生は「隣の人に気づいたことを聞いてみよう」「いろいろな見方や感じ方を大切にしたい」と意見交換を促した。「象徴天皇制を支持する人がとても多いことに気づいた」と書いた生徒は、隣の生徒から「戦争放棄を必要なしと考える人が28%もいることに驚いた」と聞いて、「それは気づかなかった。確かにそうだ」と見方への理解が深まったことがうかがえる。

授業では、個人ワーク後に学び合いを行い、知識を確認したり、考えを深め合ったりさせる。例えば、戦後の帝国議会の写真の特徴を記述する問3で、最初は「女性が多い」と書いた生徒が、学び合い後に「女性が進出している」と書き直した。わずかな表現の差だが、時代背景

授業プリント

1. 日本国憲法制定までの道のり

2. 大日本帝国憲法の特徴について、主権者、保障されている権利、統治機構という3つの観点から説明しよう。【問】

3. 次の写真は、日本国憲法の成立を決めた第90帝国議会の写真である。この帝国議会の出席議員について、それまでの議員と異なる特徴は何か。【問】

4. 次の日本国憲法と大日本帝国憲法を比較した表を完成させよう。【問】

事項	日本国憲法	大日本帝国憲法
公布日/発布日	1946年11月3日	1889年2月11日
施行	(昭和21年)5月3日	1890年11月29日
制定の動機	(昭和21年) 戦後の憲法	(明治22年) 憲法制定
採録の外国憲法	主としてアメリカ合衆国憲法	(明治22年) 憲法
形式	成文憲法・硬性憲法	(明治22年) 憲法・硬性憲法
主権	(昭和21年) 主権	(明治22年) 主権
天皇	象徴天皇制	(明治22年) 主権
選挙の形態	選挙権の拡大	選挙権の制限
戦争と軍部	戦争の放棄、軍力の不保持、交戦権の否認	天皇大権としての陸海軍の統帥権
国民の権利	永久不侵の権利	天皇大権としての陸海軍の統帥権
	国政上最大限に尊重する	(明治22年) の憲法内のみ

上・表面/守田先生の解説を自分なりに整理し、書き込んでいる。下・裏面/問1の記述では、「国民はどんな修正が必要と感じたのかを知りたくなった」と関心が高まっている様子が見られる。最下部に生徒の自己評価と、教師の評価記入欄が設けられている。\*学校資料を編集部に一部修正し、掲載。

\*1 ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

## 単元の指導計画

【教科・科目】公民科—政治・経済 【分野・単元】現代の政治（第2章日本国憲法と国民主権）

【テーマ・作品】日本国憲法制定までの道のり 【設定時数】2時間の中の1時間目

【単元目標】日本国憲法制定までの道のりと日本国憲法の特徴を理解する

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	日本国憲法制定までの道のり (1)明治憲法の制定と明治憲法の特徴 (2)明治憲法下での政治 (3)日本国憲法の制定	<ul style="list-style-type: none"> <li>明治憲法の特徴についてまとめ、説明することができる【思考力・表現力】</li> <li>日本国憲法制定当時の様子を資料から考察しようとしている【技能・判断力】</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>教科書を参考にして、授業プリントの空欄を補充する。その後、生徒同士で確認する。</li> <li>本時の要点について、説明する。</li> <li>課題（練習問題）に取り組む。</li> <li>記述内容について、生徒同士で確認や意見交換を行う。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】 現行憲法制定当時の世論調査や写真から、戦後の日本社会がどのように変わろうとしていたかイメージさせる。</p> <p>【対話的な学び】 ほかの生徒がどのようにまとめているか、情報交換を行う機会をつくる。</p> <p>【深い学び】 課題を難しく感じている生徒が多い場合は、ヒントを出し、ほかの生徒と相談しながら取り組むように助言する。</p>	授業プリント
2	日本国憲法の基本的性格 (1)日本国憲法の基本原理 (2)国民主権と象徴天皇制 (3)憲法の最高法規性と改正手続き	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本国憲法における天皇の地位と役割について説明できる【思考力・表現力】</li> <li>法改正について自分の考えをまとめようとしている【判断力・主体性・多様性】</li> <li>憲法改正手続きについて、理解している【知識】</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>教科書を参考にして、授業プリントの空欄を補充する。その後、生徒同士で確認する。</li> <li>本時の要点について、説明する。</li> <li>課題（練習問題）に取り組む。</li> <li>記述内容について、生徒同士で確認や意見交換を行う。</li> </ol>	<p>【主体的な学び】 憲法改正について、自分の考えを持つことと、他者との共通点や異なる点に気づくことができる。</p> <p>【対話的な学び】 ほかの生徒がどのようにまとめているか、情報交換を行う機会をつくる。</p> <p>【深い学び】 課題を難しく感じている生徒が多い場合は、ヒントを出し、ほかの生徒と相談しながら取り組むように助言する。</p>	授業プリント

\*守田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成

を広げていた。

守田先生は、生徒同士の学び合いを促すため、プリントの解答は配らないと言う。

「教師よりも友人の方が気楽に聞けますし、教える側と教わる側の双方の学びになります。特に、自分が何を理解できていないかすら分からない生徒が、友人には『何で？』『どうして？』と分かるまで質問しています」

**成果と課題**

**知識もしっかり定着し、考える力、書く力がともに高まる**

A L 導入後に初めて迎えた17年度のセンター試験では、例年を上回る結果が出た。

「生徒に考えさせる授業は、知識の定着にも有効だと分かり、当初抱いていたA L への不安がなくなりました」

生徒の記述力も高まっている。18年度に初めて守田先生の授業を受ける生徒に比べ、17年度に授業を受けていた生徒は明らかに記述力が高い。

「形式に慣れるだけでなく、自分の考えを整理して文章にする力がついていると感じます。また、プリント裏面の課題に備え、空欄補充問題や要点解説に集中して取り組む様子も見られます」

今後の課題は、生徒同士の学び合いをより深めることだ。その中で、「Classi」（\*2）を活用し、予習で知識を習得させ、授業は議論を中心に進めるといったことも考えている。また、定期考

査でも思考力などを問う出題を増やす予定だ。

「各教科の授業改善も進んでおり、学校全体で社会に出てから生きる力を育てたいという思いを持っています。その中で、社会の事象に疑問や関心を持って思考し、人に分かりやすく伝える力を育むことが政治・経済の役割と考え、さらに実践を重ねていきたいと思っています」

**生徒の声**

**藤本真由さん** 2年生で初めて守田先生の授業を受けた時、空所補充問題が時間内に終わらず、理解が不十分なまま記述問題に取り組んでいたのが、あまり書けませんでした。それが、次第に教科書からキーワードをつかむスピードが速くなり、それを基にしっかりと書けるようになりました。また、学び合いは、自分が教える自信になり、相手の意見を聞くと考えが深まり、いろいろな人と仲よくなるきっかけにもなり、一石三鳥です。守田先生の授業を受け、自分の考えを持って周囲と交流することが大事だと感じています。

**山田純さん** 私は書くことが得意ではないので、初めは守田先生の授業に苦労しました。それでも授業を受けるうちに考えることに慣れ、どう表現すれば自分の考えを分かりやすく伝えられるのかを、次第に理解していきました。また、学び合いでは、相手の意見を聞いたり、自分の考えを説明したりする時に、「こんな考えもあるのか」と思うことがよくあります。今では、自分で考える授業が楽しくて、時間が経つのが早く感じています。

\*2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

●1年生の化学基礎「物質の構成」における「物質の三態と熱運動」を学ぶ全2回の1回目。ペアワークやICTを活用しながら、熱運動と温度の関係、セルシウス温度と絶対温度の関係について理解を深めた。(P.31に単元の指導計画を掲載)

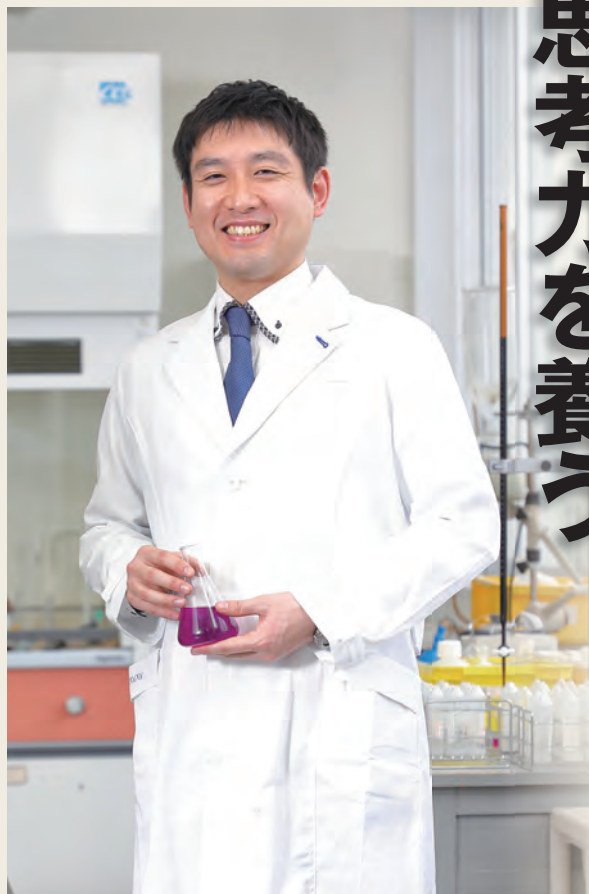
授業はICT機器が常設される化学室で毎回行う。まず、前時の復習として、学習内容を個人で2分間振り返った後ペアになり、説明し質問をし合う活動を行った。生徒自身が黒板のタイマーを見ながら進める間、円井先生は机間巡視をし、生徒の理解度をチェック。最後に先生に指名された生徒が、1分間でクラス全体に向けて説明した。

「なぜ」と尋ねる発問を積み重ね、  
自分の考えを持たせることので、  
科学的な思考力を養う

円井先生のアクティブ・ラーニング

「分かりやすいだけの授業でよいのか」という自問から始まった授業改善

円井哲志先生が、自身の授業に疑問を持ち始めたのは、前任校にいた8年ほど前のこと。生徒からは「円井先生の授業は分かりやすい」と言われていたが、その意味が「定期考査で点が取れるようになる」ということだと気づき、今のままの授業でよいのかと疑問が湧いたと言っ



岩手県立盛岡第三高校

円井哲志 つむらい・さとし

教職歴16年。同校に赴任して5年目。  
理科(化学)担当。進路指導課。  
アクティブ・ラーニングの実践は5年目となる。

岩手県立盛岡第三高校

◎校訓は「ずいじょ随処為主」「こうこく鴻鶴之志」。2011年度から文部科学省「こくごスーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、また、17年度から学校独自に「サイエンスリサーチハイスクール事業」を行い、課題発見・問題解決能力の育成を図る。

◎設立 1963(昭和38)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2018年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道大、弘前大、岩手大、東北大、筑波大、千葉大、東京外国語大、国際教養大などに184人が合格。私立大は、岩手医科大、慶應義塾大、上智大、津田塾大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ159人が合格。

◎URL

<http://www2.iwate-ed.jp/mo3-h/>

次に、円井先生は「なぜ拡散が起こるのか」と発問。物質はエネルギーがあるから動き、温度に応じて熱運動を行うことを、生徒同士の対話を通して気づかせた。そして、熱運動の様子をイメージし、熱運動の速さと温度が密接にかかわることを実感させるため、分子が高速で動く動画をプロジェクターに映した。なお、復習時のために動画の撮影を許可している。

臭素と窒素がそれぞれ入ったビンをつなげた画像をプロジェクターに映し、「2つを混ぜたら何が起こるか、なぜ起こるのかを考えよう」と発問。まず個人で考え、次にその考えをペアで共有し、数人の生徒がクラス全体に発表した。途中で円井先生は、中学校の教科書を見せ、水と砂糖が混ざり合う現象を例示。臭素と窒素が混ざり合い、均一になったこと（拡散）に気づかせた。

公教育に携わる者として、分かりやすいといっただけでなく、学ぶのが楽しいと、生徒が学ぶ意欲を高められる授業でなければ……。そう考え始めていた円井先生に転機が訪れたのは、現任校に赴任した2014年度だ。同校では、アクティブ・ラーニング（以下、AL）が注目される前から、生徒主体の「参加型授業」を全校で実践していた。円井先生も早速ALを取り入れ、同僚と意見を交わしながら指導力を高めていった。

円井先生は、当初、グループワークやプレゼンテーションなどの活動を行えばALになると思っていた。しかし、ある時、「ALには正解がある」ということにとらわれていた自分に気づいたと言う。

「私は、教師が答えを教えてくれるのを待っている生徒と同じ状態で、実践をしながら誰かが『これがALだ』と言ってくれるのを待っていたのです。そうではなく、私自身がアクティブ・ラーナーとなり、目の前の生徒に何が必要かを考え、よりよい授業を模索し続けなければならないことに気づきました」

円井先生には、文理を問わず、生徒が化学の授業で学んだ知識・技能を大学や社会で生かしてほしいという思いがある。

「化学が入試科目ではなくても、すべての生徒にとって、科学的な見方や考え方、コミュニケーションや表現のスキルは必要です。ALは化学を通じたキャリア教育を実践するための手段で

もあると捉えて、授業をしています」

#### 思考の活性化・深化への配慮

### 「覚えることが化学ではない!!」 「なぜそうなるのか」にこだわる

今回の授業で扱った「物質の三態と熱運動」は、1時間で終える場合もあるが、円井先生はあえて2回に分けて授業を行った。その理由は、1つの單元の中に主体的・対話的で深い学びを盛り込むことができるからだ。加えて、科学的な見方・考え方とはどのようなものか、これから1年間、化学をどのような授業形態で学んでいくのかを、入学したばかりの1年生に体感させるためでもあった。

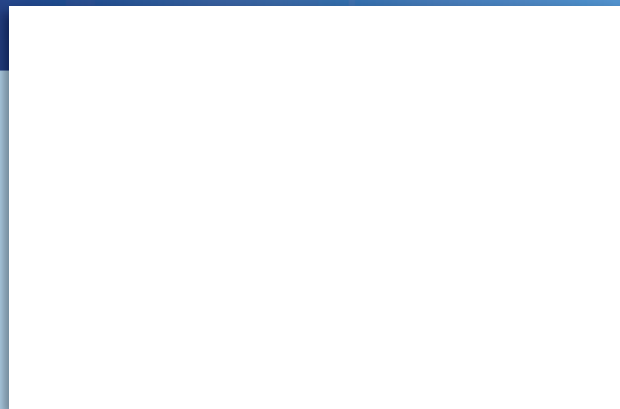
円井先生は、授業中に何度も「絶対零度がマイナス273℃だと暗記するだけでは駄目」「自分で法則を見つけることが大切」「答えは1つとは限らない」と声をかけ、化学が単なる暗記科目ではないことを強調した。

「大切なのは、知識を覚えることではなく、なぜそうなるのかを考え、理解することです。そこで、授業では問いを投げかけ、少しずつヒントを与えながら、生徒自身に気づかせ、あなたも自分が法則を発見したかのような達成感を味わわせるように心がけています」

深い理解へ誘うために円井先生が多用しているのが、「個人の思考↓ペアワーク↓全体共有」という流れだ。今回の授業でも、前時の復習を



本時の学習を踏まえ、あらかじめ配布した穴埋め式の授業ノートに、解答を記入させた。この日は、生徒から多様な質問が出たこともあり、それらに円井先生が答えるうちに授業は終了した。指導計画上は、絶対温度でセルシウス温度を表す練習問題に取り組みさせた後、生徒が説明しながらホワイトボードに貼って、授業内容をまとめる予定だった。



「温度には、上限や下限があるのか」と発問して考えさせた後、温度には上限はないが下限があり、下限の温度が $-273^{\circ}\text{C}$ （絶対零度）であると説明。絶対零度での分子の状態を個人で、続いてペアで考えさせた。そして、セルシウス温度( $t$ )と絶対温度( $T$ )を起点とする絶対温度の目盛を並べた図版をモニターに投影し、 $T = t + 273$ の関係になることを理解させた。

始め、その流れに沿って、生徒に考え、表現させた。そして、発問では、「どうなると思う?」「何で?」と問いかけ、自分の考えが出てこない生徒には、少しずつ助言を与えながら最後まで発言し切れるようサポートした。

ICTも、思考の深化や理解のために随所に活用している。例えば、書画カメラに物質の模型を投影し、模型を動かしながら説明することで視覚的に理解を促す。

動画の見せ方も工夫している。今回、分子が激しく運動する動画を見せる際には、「目を閉じて」と顔を手で覆わせ、教室の電気を消して動画を再生してから、生徒にゆっくり目を開くように言った(写真1)。暗闇の中で色とりどりの分子が飛びまわる動画を見て、生徒から一斉に歓声が上がった。

「生徒には、動画や実験をスマートフォンで撮影することを許可しています。自分が行った実験を、再度見て復習することは学びの定着につながります」

### 場づくりへの配慮

「どう思うか」に間違いはない  
どんな発言も受け入れる雰囲気

円井先生は、場づくりの工夫としても、ペアワークを多用している。1人が教師役、もう1人が生徒役になって説明し合ったり、授業中に何度も発せられる先生の発問について協働で考

えたりする。2人1組にこだわるのは、1対1なら自分の考えを持たなければ議論ができず、自分の役割に責任感が生じるためだ。また、大勢の前でなく、相手が1人なら緊張しなくてすむという理由もある。

教室は間違ってもよい場所であると生徒が感じられるよう、雰囲気づくりも大切にしている。「生徒は誰でも、みんなの前で間違えたくないと思います。ただ、『どう思う?』という発問で求められているのは、正解ではなく、生徒自身の考えです。『分かりません』と答えるのは頭を働かせていない証拠ですから、『自分の考えを言えばよい』のだから、分からないということはないはずだよ」と伝え、自由に考えを述べられる雰囲気をつくるようにしています」

生徒が自由に発言することで、それぞれ独自の見方や発想に触れられるのも利点だと言う。「生徒との対話を通して見えてきた共通の間違いなどは、授業改善に反映するようにしています。生徒をアクティブにすることで、私自身も成長させてもらっています」

### 成果と課題

「分かりやすい」+「楽しい」で  
能動的な学習態度が身につく

円井先生の授業に対する生徒の感想は、以前の「分かりやすい」に「楽しい」が加わるようになった。生徒の学習が能動的になり始めてい

## 単元の指導計画

【教科・科目】理科・化学基礎 【分野・単元】物質の構成 物質の探究 物質の三態と熱運動

【テーマ・作品】粒子の熱運動 【設定時数】2時間の中の1時間目

【単元目標】【知識・技能】粒子の熱運動と温度・状態変化に関する事象・現象に対する概念や原理・法則と科学的探究についての理解や、探究のために必要な観察・実験等の技能を身につける。

【思考力・判断力・表現力等】粒子の熱運動と温度・状態変化に関する事象・現象の中に見通しを持って観察・実験などを行い、科学的に探究したり、科学的な根拠を基に表現したりすることができる。

【学びに向かう力等】粒子の熱運動と温度・状態変化に関する事象・現象に進んでかかわり、それらを科学的に探究しようとするとともに、探究の過程などを通じて獲得した知識・技能や思考力・判断力・表現力を日常生活などに生かそうとする。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	粒子の熱運動	<ul style="list-style-type: none"> <li>拡散が起こる理由、温度とは何かを科学的に探究しようとしている【<b>主体性</b>】</li> <li>温度は熱運動の激しさの程度を表していることを見だし、表現している【<b>思考力・表現力</b>】</li> <li>セルシウス温度と絶対温度との関係性を理解している【<b>知識</b>】</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>前時の復習。</li> <li>導入として、拡散について発問する。</li> <li>学習1/拡散と熱運動、熱運動と温度との関係性について学ぶ。</li> <li>学習2/絶対温度とセルシウス温度との関係性について学ぶ。</li> <li>本時のまとめ。</li> </ol>	<p>【<b>主体的な学び</b>】生徒が見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学びを振り返って次の学びにつなげるよう配慮する(熱エネルギー、熱運動に着目し、拡散が起こることを考える学び→温度は熱運動の激しさの程度を表していることを考える学び→セルシウス温度と絶対温度との関係を明らかにする学び)。</p> <p>【<b>対話的な学び</b>】発問の後、自らの考えを持たせるよう工夫する。その上で、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深めることにつなげるよう配慮する。</p> <p>【<b>深い学び</b>】習得・活用・探究の見通しの中で、理科(化学)の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現できる場面を設定する。この時、学習内容の深い理解につなげるよう配慮する。</p>	発表、授業プリント
2	熱運動と状態変化、物理変化と化学変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>物質の三態と粒子の熱運動、及び分子間力との関係性を理解している【<b>知識</b>】</li> <li>状態変化をしている間、温度は一定に保たれる理由を科学的に探究し、表現している【<b>思考力・表現力</b>】</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>前時の復習。</li> <li>導入として、物質の三態について発問する。</li> <li>学習1/物質の三態と熱運動、分子間力との関係性について学ぶ。</li> <li>学習2/物理変化と化学変化について学ぶ。</li> <li>本時のまとめ。</li> </ol>	<p>【<b>主体的な学び</b>】これまでの学びを振り返り、熱運動と分子間力との関係性に生徒自らが着目し考え、それらに対する仮説を立てることができるよう配慮して授業を進める。</p> <p>【<b>対話的な学び</b>】発問の後、自らの考えを持たせるよう工夫する。その上で、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深めることにつなげるよう配慮する。</p> <p>【<b>深い学び</b>】習得・活用・探究の見通しの中で、理科(化学)の特質に応じた見方や考え方を働かせて思考・判断・表現できる場面を設定する。この時、学習内容の深い理解につなげるよう配慮する。</p>	発表、授業プリント

\*円井先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成

### 生徒の声

**川代みそらさん** ペアで話し合い、予想を立てながら学習を進めていくので、自分の考えを持つ習慣ができてきたと思います。主体的に授業に取り組めるので、先生が解説する時も集中して聞くようになり、内容が頭に残りやすくなりました。動画を見せてくれたり、先生自身が実験道具を使って実演してくれたりするので、化学現象や実験を具体的にイメージしやすいところも魅力です。これから始まる実験も楽しみです。

**田鎖楓子さん** 今日は最初の振り返りで発表しましたが、私が答えやすいように、先生は声をかけて導いてくれたので、しっかり自分の考えを述べることができました。話し合いでも意見を共有するだけでなく、「なぜそうなるのか」という理由まで伝えます。自分の意見を持つだけでなくペアの意見も聞き、自分の意見とどこが違うのか、同じなのかを考えて、改めて自分の考えを組み立て直すようになりました。

**田中成樹さん** 円井先生の授業では、最初に仮説を立てて結果を見ていくので、正解だった時は達成感があり、間違ってもそれが記憶に残るので知識や考え方が身につけやすいと思います。ペアワークでは自分の考えを持たなければならず、発表の機会も多いので、主体的に取り組めます。先生の授業では、自分の考えを伝える力やコミュニケーション力も伸ばしていけるとと思います。

**写真1** 動画を再生してから生徒に目を開かせ、分子の動きが目に飛び込み、印象が強く残るようにした。

「ループリックを用いた評価やパフォーマンス評価に、これから着手していきたいと考えています。現状では授業ノートの記述や授業内の発表などを評価の対象としていますが、時間のやりくりを含めて、適正に生徒の成長を見取っていく方法を考えていきたいと思っています」

今後の課題は、評価手法の確立だ。

「ルーブリックを用いた評価やパフォーマンス評価に、これから着手していきたいと考えています。現状では授業ノートの記述や授業内の発表などを評価の対象としていますが、時間のやりくりを含めて、適正に生徒の成長を見取っていく方法を考えていきたいと思っています」

るといふ手応えを感じている。また、自分で考え発見する喜びを得たことで、大学入試に向けて主体的に学び始めた生徒や、薬品の成分表など身の回りの物質に興味を持つ生徒も増えてきている。

新潟県・新潟市立高志中等教育学校

主体的な学習意欲の醸成

# 知識の「活用」を重視した 指導の「質」の改善で、 学びを深める生徒を育成

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 「量」重視の学習指導により、学ぶ意欲や目的意識を持ってない生徒が少なくなかった

### 実践内容

- 教師間の連携の強化** 中学校籍と高校籍の教師の交流を活性化し、全校を挙げた指導改善への合意形成を推進。「6年間でともに生徒を育てる」という意識の下、全学年で段階的に目標を設定し、宿題などの「量」と「質」を変えていくことにした
- アクティブ・ラーニングの理解と普及** 大学教員を講師とするアクティブ・ラーニング（以下、AL）の研修を定期的に行い、教師の意識改革を徹底。教師は知識・技能の「活用」の重要性を実感し、ALを取り入れた、生徒の考えを深めさせる授業が全学年で行われるようになった
- ルーブリックの策定** 生徒の成長を可視化するため、思考力や主体性などを評価するルーブリックの作成を進めた

### 成果と展望

- 意欲的に学習する生徒が増加
- ALが定着し、生き生きと学びを深める生徒が増加

## PROFILE



市内唯一の中等教育学校として開校。高い志と豊かな知性・人間性、国際感覚を備えたリーダーの育成を目指している。社会に開かれた学校づくりに向け、新潟市の「地域と学校パートナーシップ事業」を継続中。

設立	2008（平成20）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約120人

**2018年度入試合格実績（現役のみ）** 国公立大は、北海道大、山形大、筑波大、千葉大、新潟大、金沢大、札幌医科大、茨城県立医療大、新潟県立大などに60人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立命館大などに延べ133人が合格。

住所	〒950-0926 新潟県新潟市中央区高志1-15-1
電話	025-286-9811
Web site	<a href="http://www.kohshichuto.city-niigata.ed.jp">http://www.kohshichuto.city-niigata.ed.jp</a>

## 生徒の学習意欲を高めるため、「量」から「質」へ指導の転換を図る

新潟県・新潟市立高志中等教育学校では、主体的な学習集団を形成すべく、2014年度から、指導改善を段階的に推進している。

校名の通り、高い志を抱いた生徒の育成を目指し、旧帝大を始めとする最難関国公立大学の合格者を毎年出すなど、進学実績も好調な同校だが、以前は生徒の学習意欲に課題があった。宿題などの学習の「量」を重視していたが、そうした指導によって学力を伸ばす生徒がいる一方、量を消化しきれず、学習に前向きになれない生徒も少なくなかったという。三林伸広（さんばひろ）教頭は、次のように語る。

「考える面白さに気づけば、生徒は学習が楽しくなり、積極的に取り組めるようになるはずです。そうした生徒を増やす必要があると感じ、学習と指導の『質』の転換を目指しました」

## 教師間の合意形成を進め、6年間の段階的な指導方針を作成

最初に取り組んだのは、教師間の連携の強化だ。中等教育学校では、一般的に中学校籍の教師が1〜3年生、高校籍の教師が4〜6年生を担当するが、全校を挙げた指導改善を始めるにあたり、両者の交流を活性化して合意形成を進

め、「6年間でともに生徒を育てる」という意識を醸成しようと考えた。

そこで、まずは三林教頭が、両学校籍の教師の相互理解につながるよう、積極的に声をかけた。例えば、保護者とのコミュニケーションを重視するかどうかについて、以前は学校籍による意識の差が見られたため、三林教頭は保護者対応の重要性を全教師の前で語った。

そうして、両者がより交流しやすくなる雰囲気づくりを進める中で、柔軟な学年編成も導入した。学校籍にかかわらず、どの教師も1〜6年生の授業を行うようにするとともに、中学校籍の教師にも、4〜6年生の担任や学年主任を任せることにした。すると次第に、両学校籍の教師は学年運営や指導の仕方などについて日常的に意見を交換し、相談し合うようになった。

全教師のコミュニケーションが緊密になるに従って、6年間を俯瞰した学力形成のイメージも明確になっていった。そして、段階的に目標を設定し、宿題や週末課題などの「量」と「質」を変えていくという方針も固まった。1・2年次では、学習習慣の定着を目的として、以前と同じように各教科担当が定期的に課題を出す。3年次以降は、主体的な学習への意識づけを強化。学年が上がるにつれて教師は指定する課題を減らしていき、その分、生徒には頑張りたい教科・科目に応じて学習内容・量を自分で決めるよう指導する。上野昌弘校長は、こう述べる。

「生徒一人ひとりが自分に合った学習内容・

量を設定できているかどうか、しつかり把握したいと思います。そうすれば、改善点のフールドバックを始めとする個別指導に生かせるでしょう。生徒がきちんと自己調整できるように、後押ししていきたいと考えています」

## 「知識を活用して考える問い」への教師の意識づけを徹底

次に力を入れたのは、知識・技能の「量」よりも「活用」を重視する指導への転換だ。そこで、15年度、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の研究に取り組み始めた。

当時は、ALについて盛んに語られるようになって間もない頃であり、同校でもALを表面的にしか理解していない教師が少なくなかった。例えば、生徒同士で話し合いをしたり、特定の思考ツールを使ったりすれば、ALになると考えている教師もいたという。そこで、まずは、教師の理解を深めることを最重要課題と位置づけ、16年2月、コミュニケーション教育に詳しい星椋大学の北川達夫客員教授による研修を行った。北川教授からは、東京大学の個別学力検査における英語の問題とその採点方法などが紹介され、今後は他の国公立大学の入試でも思考力・判断力・表現力がより重視されるようになるだろうという予測が示された。

9月には、再び北川教授による授業研究が行われ、具体的にどのように授業を変えていくべきかを学んだ。北川教授は、生徒が正解を出す



新潟県・新潟市立高志中等教育学校校長  
**上野昌弘** うえの・まさひろ  
教職歴35年。同校に赴任して1年目。「よく遊び、よく学べ。学校は子どもにも教師にも学ぶ喜びに満ちた場所でないといけない」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校教頭  
**三林伸広** さんばやし・のぶひろ  
教職歴30年。同校に赴任して4年目。「プロフェッショナルである以上、複雑なことをシンプルにできないならならぬ」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校  
**田中裕久** たなか・ひろひさ  
教職歴16年。同校に赴任して3年目。進路指導主事。「学びに『楽しさ』はあれども『楽』はなし」



新潟県・新潟市立高志中等教育学校  
**伊丹 優** いたみ・すくむ  
教職歴7年。同校に赴任して2年目。研究主任。「『がむしゃら』の精神を大切にして挑戦を続け、何事にもベストを尽くしていきたい」

だけではなく、なぜかを考えたり、別解はないのかを探ったりするような「生徒が自分の知識を活用して考える問い」を立てることの重要性を強調した。また、発問の仕方をどのように変えるべきなのか、教師一人ひとりが検討してほしいと呼びかけた。

そうして学校全体でA Lの本質と必要性への共通理解が深まっていき、当初は戸惑っていた教師も、次第に指導改善に前向きになっていった。田中裕久先生は次のように思いを述べる。

「以前はA Lの導入を自分事として考えられなかったのですが、北川先生の話や聞き知識の『活用』が切実な課題になっていると実感しました。思考力の捉え方も教科・科目によって違いがあることを知り、自分が担当する化学の授業では何をすべきなのか、何ができるのか、考えるようになりました」

### 意欲的に学ぶ生徒の姿が、指導改善をさらに推進させる

17年度になると、授業に意識的にA Lを取り入れる教師が増えていった。田中先生もその1人であり、1学期の前半には、「浸透圧を社会でどのように生かすのか」というテーマを設定し、話し合いを中心とした探究型の授業を行った。すると、「水位の差を利用して発電に用いる」といった物理の学習内容を活用したアイデアを出すグループが出るなど、予想以上に考えを深めていた生徒が目立ったという。三林教頭は、

写真1 6年生の「世界史B」の授業では、世界各国の経済格差が生じる要因を考えた。生徒間で活発に意見交換が行われ、地理的な要因や独立した時期といった様々な角度から分析・推測する姿が見られた。

\*写真は、2点とも17年度の公開授業の様子

次のように振り返る。

「田中先生から聞いた生徒の意欲的な様子もよく覚えていますが、それを説明している田中先生の表情の輝きが忘れられません。生徒の変化を実感できれば、教師の意欲はさらに高まるでしょう。指導改善が着実に前進し

写真2 枝豆の作付面積が日本一である新潟県は、なぜ出荷額では7位なのか、統計データを読み取りながら考えた4年生の「数学I」の授業。グループごとに話し合う中で、生徒一人ひとりが自分の考えを深めていったという。

ていくと思いました」

夏季休業中には、北川教授の指導により、高学籍の全教師が思考力の求められる問題に取り組み、「思考力とはどのようなものか」というイメージを共有。そして2学期には、4〜6学年でA Lを取り入れた公開授業を行った(写真1・2)。例えば、地理歴史科では、「地勢的に経済格差の要因を探る」という問いを設定した。すると、知的好奇心を刺激され、目を輝かせて取り組む生徒が少なくなかったという。

### 生徒がさらに成長できるよう、自分の変化の客観的把握を促す

18年度には、主体的な学習意欲のさらなる向上を目指し、生徒一人ひとりの成長の「見える化」に力を入れている。現在は、次期学習指導要領に示された育成すべき資質・能力の3つの柱を中心とした、評価方法の改善を推進中だ。

思考力の客観的な把握に向けては、ベネッセの「GPS Academic (\*1)」（以下、GPS）の活用を始めた。1〜3年次には、以前からベネッセの「中学総合学力調査(\*2)」で思考力を測定していたが、4年次以降の測定が課題となっていた。そこで、18年度からは、4・5年次にGPSを導入し、5年間の推移を把握できるようにした。さらに、各教科・科目の思考力の深まりを把握しようと考え、GPSを参考にしながら、ルーブリックの作成も進めている。主体性の評価については、文部科学省の発信

\*1 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。  
\*2 ベネッセの教材の1つで、「教科の思考力、判断力・表現力」を測定し、段階別評価を行うテスト。

資料を分析したり、大学のアドミッシン・ポリシーやディプロマ・ポリシーから主体性にかかわる内容を抽出したりして、研究を重ねた。そうして、まず完成させたのが、体育祭のルーブリックだ(図)。「計画性・主体性」「表現・協働」といった4項目から成り、生徒が体育祭での行動を振り返り、それぞれ4段階で自己評価を行う。今後は、ほかの行事や部活動などの課外活動でもルーブリックを作成し、内容を精緻にしていく。

「行事や課外活動が『楽しかった』という

図 体育祭のルーブリック

1 ルーブリック (自分で該当する箇所には○をつけましょう)

	計画性・主体性	表現・協働
S	自分の将来や他者の発展を見据えて、明確な目的意識を持って活動を計画し、実行した。	問題解決に主体的に参画し、他者に働きかけ、アイデアを提案させながら合意形成ができた。
A	目的意識を持って活動を計画し、実行した。	問題解決に参画し、他者とアイデアを出しながら合意形成をした。
B	自ら活動を計画し、実行した。	問題解決の実行者を支援する立場で合意形成をした。

「自分の将来や他者の発展を見据えて、明確な目的意識を持って活動を計画し、実行」といった、自分を周囲とのかかわりの中で捉え直す項目が目立つ。文章を書いて振り返る欄も設けられている。

\*学校資料を基に編集部が一部改編

た感想だけで終わらないよう、自分の変化を客観的に把握する指標が必要だと考えました。また、他者を気遣ったり、感謝する気持ちを持ったりするようになることも、精神的な成長です。そこで、主体性のルーブリックでは、周囲とのかかわりの中で自己理解を深められるよう工夫しました(三林教頭)

各教科・科目でも、ルーブリックによる評価を進めている。田中先生は、主体性や表現力、傾聴力といった各観点を4段階で評価するルーブリックを作り、実験の授業で活用中だ。そうして、多面的な見方・考え方や批判的な思考力をさらに高めていきたいと考えている。

上野校長は、ルーブリックは教師の指導力向上を図るためにも必要だと強調する。

「生徒の成長を促すためには、教師が生徒の変化について具体的なイメージを持つことが重要です。どのような言動が見られると、生徒が主体性を発揮したと言えるのかを、ルーブリックで客観的に評価していけば、生徒の力を伸ばすためにどのようなアドバイスすべきなのか、教師は考えを深められるでしょう。生徒の状況を客観的に把握し、指導改善に役立てることができるよう、ルーブリックの活用を進めていきたいと考えています」

### ICT環境の整備を進め、生徒の主体的学習への支援強化を目指す

指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。

ALを推進する中で、他教科・科目で学習した知識・技能を活用して考えたり、堂々と考えを発表したりする生徒が目立つようになり、学習意欲の高まりがうかがえる。知的好奇心を刺激され、目を輝かせて学習する生徒の存在は、前述した通りだ。また、ALの取り組みは充実し、率先してルーブリックを活用する教師も増えている。18年度のALの推進について、研究主任の伊丹優先生はこう話す。

「授業公開にとどまらず、ALの視点を重視した研究授業に取り組みたいと思っています。そうして、生徒が何を身につけたのかを見取り、今後どのような授業展開が可能なか、追究していく必要性を感じています」

ICT環境の整備も、今後の目標の1つだ。全校のWiFi化、1人1台のタブレット配備を進め、eポートフォリオの構築を目指す。そうして、ICTを活用した反転授業やPBL(\*3)を始め、学習と指導の「質」のさらなる向上を目指す。三林教頭は、今後をこう語る。

『見える化』が容易な点もICTのメリットです。例えば、家庭学習の記録をグラフ化して示せば、紙の記録とは異なる新たな意欲を、生徒に喚起できるようになるでしょう。また、ルーブリックも、生徒の成長を見取る『ものさし』として、さらに充実させていく予定です。そうしたツールの活用を推進し、生徒の主体的な学習意欲を伸ばせるよう、指導改善を続けていきたいと考えています」

\*3 「Problem Based Learning」もしくは「Project Based Learning」の略称。問題解決型学習。

# 生徒の「やればできる」を 学校全体で支援し、 自己実現への意欲を醸成

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 学力や生活習慣に課題のある生徒が増える傾向にあった。そうした中で、自分に自信が持てない生徒も目立つようになっていた

### 実践内容

- **「Reスタ」** 週4日、1・2年生全員が数学・英語の学び直しに取り組む「Reスタ」の時間を正課として位置づけ、全教師が連携して指導する体制を構築
- **キャリア教育** 自分のよさに目を向ける→将来の展望を描く→興味のあることに挑戦するという段階的なカリキュラムを作成。「未来デザインコース」の2・3年次には、生徒が自分のやりたいことの実現を目指す「ミラクルプロジェクト」に取り組む
- **「i-Koryo」** ICTサービスを活用し、授業の板書の写真や提出物などを、生徒に毎日配信する取り組み「i-Koryo」を推進

### 成果と展望

- 自分に自信を持ち、学習に前向きに取り組む生徒が増えた
- 教師の生徒理解が深まった

富山県・私立高岡向陵高校は、高い目標を持ち、困難を恐れずにその実現を目指す人材の育成に力を注いでいる。生徒は明るく素直だが、近年は地域の人口が減少する一方、入学定員数に大きな変化はないため、学力や生活習慣に課題のある生徒が増える傾向にあった。そうした中、自分に自信が持てず、「自分には難しいかもしれない」と思って、第一歩が踏み出せない生徒も目立つようになっていた。生徒に成功体験を積みせようと考え、指導を工夫する教師もいたが、学力の多層化への対応が難しく、思うような成果が上がっていなかったという。

## 生徒の主体的な進路選択に向け、 成功体験の積み上げを目指す

## PROFILE



校訓に「努力・勇気・誠実」を掲げ、時代の要請に応じながら、生徒個々の能力を最大限に伸ばす教育の実現を目指している。部活動も盛んであり、ハンドボール部や相撲部、陸上競技部などが全国大会への出場実績を持つ。

設立 1962(昭和37)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約185人

2018年度進路実績(現役のみ) 私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ33人が合格。短大、大学校・専門学校進学50人。就職56人。

住所 〒933-8538 富山県高岡市石瀬281-1

電話 0766-23-0762

Web site <https://takaokakoryo-h.ed.jp>

そこで、2017年度、コースを「未来デザインコース」「未来探究コース(\*1)」に再編したのを機に、全校を挙げた指導改善を始めた。吉野ひろみ教頭は、次のように語る。

「生徒が本道に進みたい道を見つけ、それに挑戦するためには、自分の可能性に気づかなければなりません。そこで、生徒一人ひとりが『やればできる』という実感をえられるよう、学力向上とキャリア教育を中心に、取



富山県・私立高岡向陵高校教頭  
**吉野ひろみ** よしの・ひろみ  
 教職歴20年。同校に赴任して14年目。「何事も生徒とともに楽しむ。生徒が1つでも多くの成功体験を積めるよう支援する」



富山県・私立高岡向陵高校  
**藤川武命** ふじかわ・たけのり  
 教職歴10年。同校に赴任して11年目。情報管理部長。「黒板からICTまで、よいものは何でも活用する教育を実践する」



富山県・私立高岡向陵高校  
**薬師陽子** やくし・ようこ  
 教職歴10年。同校に赴任して8年目。3学年主任。「生徒に寄り添って長所を伸ばし、生徒が堂々と次のステージに進めるよう支援する」



富山県・私立高岡向陵高校  
**村上文代** むらかみ・ふみや  
 教職歴10年。同校に赴任して6年目。ミラクルプロジェクト主任。「生徒の憧れとなるような、カリスマ性のある人間、教師でいたい」



富山県・私立高岡向陵高校  
**久崎稜太** きさき・りょうた  
 教職歴4年。同校に赴任して2年目。「生徒の長所も短所もすべて受け入れ、あらゆる可能性を見つけ出せるよう指導する」

## 「Reスタ」を学校全体で推進

学力向上対策としては、週4日の昼休み後の15分間を、1・2年生全員が中学校段階の数学・英語を学び直す「Reスタ」の時間とし、それを正課に位置づけた。「ReStart(再び始める)」「ReStudy(再び学ぶ)」「ReStar(再び輝く)」という意味を込めて命名したという。各教科で週単位のプログラムを作成し、生徒の課題にきめ細かく対応できるよう、約20もの習熟度別の少人数制クラスを両学年合同で編成。管理職も含めた全教師で指導する。4日間の流れは、1日目・2日目にプリント教材を用いた講義、3日目にプレ確認テスト、4日目に確認テスト「リンクアップチャレンジ」を行うというものだ。「量」を可視化して達成感につなげるべく、プリントやテストは各自でファイルに蓄積させている(図)。

Reスタ推進の中心メンバーである久崎稜太先生は、こう述べる。

「リンクアップチャレンジの結果により、毎週、クラス替えを行います。頑張りがすぐに形として表れるため、勉強が苦手な生徒も前向きに取り組んでいます。そうした意欲をさらに伸ばせるよう、今後は上位のクラスに入った生徒を定期的に表彰する予定です」

Reスタを始めるにあたっては、教師間の合

り組みを充実させていくことにしました」

図 「Reスタ」のチェックシート

基本ベース		1日目	2日目	3日目	4日目
		Reスタ1	Reスタ2	RUCプロ	RUC
数	H	4	12	13	14
英	F	11	12	13	14
数	E	18	19	20	21
英	J	25	26	27	28
数	C	2	3	4	5
英	A	9	10	11	12
数	C	23	24	25	26
英	H	30	31	1	2
数	B	7	8	9	10
英	G	14	15	16	17

右上の「Reスタ」は、頑張る生徒を応援する、学校のオリジナル・キャラクターである。生徒が達成感を得られるよう、毎回チェック欄を設け、教師が署名・捺印する。学力の変化を意識するため、Reスタのクラス(Rank)欄は生徒自身が書く。

\* 学校資料を基に編集部が一部改編

意形成を図るため、17年2～3月に試行期間を設けた。そうして学年や教科を横断した指導を実現したことで、教師の生徒理解も深まっている。例えば、英語の教師が数学を教えると、「この生徒は、英語は苦手だけど、数学はよくできるんだ」といった新たな発見があるという。また、授業を担当していない学年の生徒の、顔と名前的一致する数が増え、生徒とのコミュニケーションが緊密になった。3学年主任の薬師陽子先生は、17年度のReスタをこう振り返る。

「生徒一人ひとりが着実に基礎を固めていく様子がよく分かりました。そうした中で、当初は担当外の教科の指導に戸惑っていた先

\* 1 2018年度からの名称。17年度時点では「文理探究コース」。

生も、次第に積極的になっていきました。他教科の先生が、数学・英語の先生と、よりよい教え方について話し合うことも増え、教師間の結束が強まったと感じています」

## 生徒が将来の展望を描けるよう、自分自身と向き合う場を設定

キャリア教育では、自分のやりたいことを具体化し、その実現を図ろうとする意欲を醸成できるよう、段階的なカリキュラムを練り上げた。

1年次には、全コースで「総合的な学習の時間」を中心に、生徒が自分と向き合う活動力を入れる。1学期のテーマは、「自分のよさを知ろう」だ。まず、生徒がクラスメート全員の良いところを書き、担任はそれを基に、「優しい人」「クラスを盛り上げてくれる人」といったグループを作る。そして、グループごとに、メンバーが互いの長所、それを感じた場面や理由などを具体的に挙げていく。情報管理部長の藤川武命先生は、次のように話す。

「自分の長所は、自分では気づきにくいものですが、クラスメートから説明されると、生徒はそれを意識するようになります。うれしそうな表情がしばしば見られ、自己肯定感が高まっていると感じました」

2・3学期には、「自分は何に興味があるのか」を探究し、それに関連する大学や専門学校を訪問したり、地域企業の校内講演会を聞いたりして、学問・職業調べを行う。一人ひとりの気づ

きをクラスで共有するため、その学問・職業に必要とされる資質や技術を解説したり、感想を述べたりする場を定期的に設けている。

「取り組みの中で、社会人の基本となる時間の厳守やきちんとした身だしなみの重要性を学び、自主的に実践するようになる生徒も目立ちます。学校外の人たちとの交流を通して、生徒が大きな刺激を受け、行動に反映させていると実感しています」（薬師先生）

## 生徒が自分の夢の実現を図る「ミラクルプロジェクト」

2・3年次は、コースごとに取り組みを行う。未来デザインコースでは、月・木・金曜日の5・6限目を、キャリア教育に特化した学校設定教科「キャリアアップ」とし、生徒が自分の夢を形にする「ミラクルプロジェクト」に挑む。18年度の2年生は、生徒のやりたいことを基に設定された「地域貢献」「学校にカフェをつくらう」といった11のグループに分かれ、それぞれの計画を推進中だ。

ミラクルプロジェクト主任の村上文代先生は、取り組みの目的をこう語る。

「社会に出れば、何事も主体的に判断して動かなければなりません。そこで、自分たちで計画を立て、長期的な見通しを持って実行していくという経験を積ませようと考えました。実現しそうかどうかにかかわらず、生徒の自由なアイデアを大切にするという方針を

立て、教師は脇役に徹しています」

全学年の教師十数人から成るミラクルプロジェクトチームの中で担当グループを割り当て、教師は自分が担当するグループの計画の進め方について、生徒からの相談に応じる。例えば、生徒が外部の専門家の指導を受けたいと望めば、計画の内容に応じてどのような職業の人が適しているかを助言するが、人選や選んだ専門家への連絡は生徒が行う。ファッションショー「高岡向陵コレクション（TKC）の開催」を目指すグループでは、ヘアメイクアーティストからヘアメイクの仕方を学んだ（写真）。

9月の文化祭では、これまでの取り組みの発表として、グループごとのプレゼンテーションやポスターセッションなどを予定している。

「やりたいことに挑戦しているの、どのグループのメンバーも、自分の役割を考え、

写真 ミラクルプロジェクトでは、専門家への依頼を始めとする外部との交渉も、すべて生徒自身で行う。TKCを企画するグループは、自分たちでモデルにメイクができるよう、メイクの仕方について専門家から指導を受けた。

\* 2 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。  
\* 3 ベネッセの教材「進路マップ」の1つ。GTZ（学習到達ゾーン）という指標で、生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、生活・学習指導用テスト。

生き生きと動いています。グループ内の意見調整や外部との交渉など、うまくいかないことも出てくるでしょうが、そうした時の試行錯誤が貴重な経験になります。文化祭での発表を、半年間の取り組みを振り返り、内省を深めるきっかけにしてほしいと思っています」（村上先生）

未来探究コースでは、1年次に描いた将来の展望を、大学の学問と結びつけて考えられるよう、学校設定教科「人文社会課題探究」「自然科学課題探究」で、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語のいずれか、もしくは複数の教科にかかわる発展的なテーマをグループごとに設定し、探究を進めながら、定期的にその成果を発表する。

「生徒には、1つのテーマでも多角的に分析できるという、学問の本質的な面白さを目に向けてほしいと思っています。そこで、教科の学習内容を組み合わせ、考える場を設けました。知識の活用がより重視されている大入試への対応にもつながると考えています」（藤川先生）

## 「Classi」を活用し、生徒に応じた指導をさらに推進

18年度には、学力向上・キャリア教育と並ぶ指導改善の3本目の柱として、教科担当と担任が連携し、生徒一人ひとりの学習を支援する「i-Koroyo」を始めた。教科担当は、毎回の授

業の板書を写真に撮影したり、小テストの問題を画像化したりして、提出物の連絡事項とともに、担任と共有する。担任は、毎日の放課後に、それらを「Classi」(\*2)でクラス全体に配信する。定期考査前には、各教科担当がポイント

を解説した動画をClassiにアップロードする予定だ。取り組み名の「i」には、「愛」「I(私)」「ICT」といった意味が込められているという。

「欠席した生徒にも、その日の学習内容や連絡事項が分かるよう、学校からの情報発信を充実させたいと考えました。本校には、不登校を経験した生徒もいるので、不安を抱えている生徒と個々に連絡を取り合う時は、メッセージ機能を使っています。欠席しがちな生徒との連絡については、学校全体での実施へ向け、先生方との合意形成を進めています」（藤川先生）

Classiは、家庭学習の習慣化を目的として、14年度に取り入れた。当初は、教師のICT活用状況に配慮し、Webテストのみを導入していたが、次第に、校内グループ、生徒カルテと、生徒の課題に応じて活用する機能を広げていった。その原動力となったのは、新たな機能を率先して取り入れた若手教師だ。球技大会で頑張る生徒の写真や、ボランティア活動に参加した生徒の振り返りなどを、コメントを添えて積極的にClassiで配信。管理職が職員会議などでそうした実践を褒めたこともあり、同じように活用する教師が増えていったという。

## 生徒一人ひとりを大切にしたい 指導の実現を目指していきたい

一連の指導改善により、生徒の様子には顕著な変化が見られる。自分に自信を持ち、何事にも前向きに取り組む生徒が増加し、引っ込み思案だった生徒も、授業で積極的に発言するようになったという。キャリア教育における生徒の生き生きとした姿は、前述した通りだ。そうした意欲は学力向上にも結びつき、18年度の2年生では、ベネッセの「基礎力診断テスト」(\*3)において、GTZ(\*4)がDゾーンの生徒が減少した。教師間の連携も強化され、学年や教科を超えた生徒の実態把握が進んでいる。

大きく実を結びつつある同校の指導改善だが、今後はさらなる充実を目指す。18年度には、Classiのポートフォリオ機能の活用を進展させ、キャリア教育の振り返りを始めとした、あらゆる教育活動の成果の「見える化」を計画した。また、ミラクルプロジェクトでは、生徒を多面的・総合的に評価できるよう、ルーブリックの作成を進めている。吉野教頭は、今後について次のように語る。

「生徒は日々成長しているため、それに応じて、教師の指導も絶えず変えていく必要があります。指導改善に終わりはありません。これからも、先生方と力を合わせ、生徒一人ひとりに寄り添う指導を充実させていきたいと考えています」

\* 4 ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、まもなく始まる夏季休業、生徒が計画的に、そして主体的に課題に取り組むための「夏期課題一覧」のあり方について検討する。

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵先生提供  
「全学年共通 夏期課題一覧」

Before

片山学園高等学校 平成29年度 9期生

### 夏期課題一覧

課題量の目安(1日当たり)

●7月7日(金)～8月4日(金) 8月21日(月)～29日(火) [38日間] (精講等あり) ●8月5日(土)～20日(日) [16日間]  
 英数国…各1時間、理社…各30分、独自の学習1～2時間 (計約6時間) 英数国…各1、5～2時間、理社…各1時間(理系理…2時間)、独自の学習2時間 (計約8時間)

教科	課題内容	7/3提出	8/16提出	8/20提出
英語	【英語文】自由英作文 ①「日本は私の中で多様性を感じていますが、多様なと感じますか」 ②「ラブレター」を完成させよう 【英語文】 ③「ラブレター」を完成させよう ④「ラブレター」を完成させよう ⑤「ラブレター」を完成させよう	【英語文】自由英作文 【英語文】自由英作文 【英語文】自由英作文	【英語文】自由英作文 【英語文】自由英作文 【英語文】自由英作文	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
数学	①「コミュニケーション」数学Ⅱ、5+10(自由学習) ②「コミュニケーション」数学Ⅱ、5+10(自由学習) ③「コミュニケーション」数学Ⅱ、5+10(自由学習) ④「コミュニケーション」数学Ⅱ、5+10(自由学習)	その1、2	その1、2 その3、4	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
国語	①現代文テーマ3 ②古文テーマ3 ③現代文テーマ3 ④古文テーマ3	①④、⑤ ②①、② ③②、③	①④、⑤ ②①、② ③②、③	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
物理	基礎問題プリント解き	問題集	問題集以外	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
化学(理系)	①「ニューロバク」化学基礎+化学(化学基礎範囲) 実験準備(2時間) ②「アクセス」化学(化学基礎+基礎範囲+化学方程式・気体の性質)	① 実験の力	① ノート(課題) ② キモスト	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
化学基礎(文系)	つかひセンター1～3 基礎問題・実践問題	基礎問題集以外 (1) 基礎問題集	基礎問題集以外 (1) 基礎問題集	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
生物	実験とともに行なった実験を準備	なし	なし	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
日本史	①「歴史」 ②「歴史」 ③「歴史」 ④「歴史」	なし	なし	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
地理	①「地理」 ②「地理」 ③「地理」 ④「地理」	① 地理の力	① 地理の力 ② 地理の力	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

課題中間提出日は7月28日、8月18日(高校生登校日)、最終提出日は、実力テスト終了日の終礼時とします。  
 ※担当の先生から別の指示がある場合はそれに従うこと。

課題

- 1 学校から出された課題でどのような力を伸ばしたいのか、もっと明確に意識させたい
- 2 課題を通してどのような力を生徒が身につけたかを確認する場をつくりたい

さらに、課題を通して生徒の成長を評価する機能の必要性も感じている。

富山県・私立片山学園中学校・高校では、目的意識を持って主体的に学習に取り組む生徒を育てるため、夏季休業中の課題の出し方の改善に着手した。課題に主体的に取り組めるよう、「課題一覧」に「課題を通して身につけたい力」を生徒に記入させている。課題に取り組むことでどのような力が身につくのか、学校からの課題以外にどのようなことに取り組めばよいかを考えるきっかけにするのがねらいだ。

課題に取り組む目的を意識化させ、より主体的な学習を実現したい

検討メンバー



ツール提供者  
富山県・私立片山学園中学校・高校  
**森内梨絵**  
もりうち・りえ



群馬県立高崎東高校  
**高橋真人**  
たかはし・まさと



埼玉県・私立武南中学校・高校  
**岡本眞一郎**  
おかもと・しんいちろう

# 全学年共通 夏期課題一覧

## After

改良ポイント

### 1 課題のねらいを明確に伝える

生徒から、アンケートなどで把握した「夏に身につけたい力」を踏まえて、教科担当が共通課題と選択課題を用意したことを生徒に伝える。

### 2 夏季休業明けに振り返らせる

2学期に行うテストの結果を踏まえて、夏季休業中の学習によって何ができたようになったか、今後どのような学習が必要かを考えさせる。



## 夏期課題一覧

年 組 番 氏名

	できるように なりたいこと BEST3	教材	課題のテーマ/ 難易度			課題テストの 出題形式	選択した 課題に○	2学期の課題テストの 自己評価	何ができるようになったか 何ができる力が 不足しているか
			古語	文法	読解				
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>古文文法力をアップ</li> <li>古語力をアップ</li> <li>古文読解力をアップ</li> </ul>	共通) 指定問題集 ●章～●章	標準	標準	標準				
		発展) 応用問題集 ●章～●章	難	難	難				
		標準) スタンダード問題集 ●章～●章	標準	標準	標準				
		基礎) ベーシック問題集 ●章～●章	基礎		—				
		自選【           】	【           】						
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>平方完成がスムーズにできるようになりたい</li> <li>文字を含む最大・最小問題が解けるようになりたい</li> <li>場合分けのやり方をマスターしたい</li> </ul>	共通) 指定問題集 ●章～●章	標準	標準	標準				
		発展) 応用問題集 ●章～●章	難	難	標準				
		標準) スタンダード問題集 ●章～●章	標準	基礎	基礎				
		基礎) ベーシック問題集 ●章～●章	基礎						
		自選【           】	【           】						

生徒の声を生かして課題を精選し、生徒自身に課題を選ばせる

まず、夏季休業前にアンケートなどで、生徒に「夏に身につけたい力」を聞き、その結果を踏まえ、「課題で身につく力」を説明する文章とともに課題を提示する。その際、全員が取り組む共通課題を絞り込んだ上で、「基礎・標準・発展」の3段階で選択課題を用意する。共通課題は学習習慣の維持に必要な最低限の量にとどめ、その代わりに自らの状況に合った課題を選ばせることで、生徒の主體的な学習を促す。

また、2学期には、夏季休業中の学習の成果を測るテストを実施し、そこでは選択した課題に応じて解く問題を選ばせる。夏季休業中に取り組んだ学習の成果を評価する場面があることを事前に生徒に伝え、学習意欲を高める。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

## 全学年共通 夏期課題一覧



## 活用の流れ

- 1 生徒にアンケートなどを実施し、生徒が夏季休業中に身につけたい力を把握する
- 2 生徒の声を基に、夏季休業中だからできる課題を精選し、共通課題、選択課題に整理する
- 3 生徒は2学期に、自身が取り組んだ課題の内容に対応した評価テストを受ける
- 4 夏季休業中の学習の成果を把握し、秋以降の学習の方針を立てる

## コミュニケーションを経て課題に取り組みことで主体性が高まる

検討会ではまず、夏季休業中の課題に対する教師と生徒の意識の問題点が話題に上った。教師は生徒の学習習慣を維持させたいという思いから、量をこなすことをつい優先してしまい、また生徒も「とにかくやっておけばよい」といった考えになりがちだ。だからこそ、夏季休業に入る前に教師が生徒の学習状況を分析した上で、「何のためにこの課題を与えるのか」を生徒に伝え、生徒も自分の学習状況を踏まえて、「何を目標に課題に取り組むのか」を考えた上で自分に合った課題を選択することが必要だという結論に至った。また、

そうした「課題を軸にした生徒と教師のコミュニケーション」が成立することで、教師の課題の精選が進み、「夏季休業中であっても取り組める課題」が減少し、「夏季休業中だからこそ取り組ませたい課題」が増えるといった好循環が期待され、生徒の学習意欲の向上につながるという意見も出た。

さらに夏季休業に限らず、年間を通して「課題一覧」をポートフォリオとして蓄積することで、教科学習における自身の成長を生徒が語る材料になるといった指摘もあった。「何を意図して学習に取り組んだのか」「その結果、何ができるようになったのか」という過程を俯瞰させる習慣は、今後の大学入試への対応にもつながるだろう。

## 検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

## 主体性を尊重することで大きな成果が期待できる

富山県・私立片山学園中学校・高校 森内梨絵 もりうち・りえ



夏季休業中の課題は、部活動に所属する成績中位の生徒がこなせる質・量を想定していますが、当然そこからずれる生徒も出てきます。全員が取り組む共通課題を減らし、選択課題を増やすのは、生徒の現状に合った考え方だと思いました。また、学習のペースメーカーとなる課題だけでなく、夏季休業中だからこそ取り組みたい課題も与えるべきだという観点は大きな気づきでした。

共通課題を精選し、選択課題を増やすのは、それなりの負荷がかかる作業です。ただ、生徒の夏季休業中の課題への取り組み方をもっと主体的なものにしたいという問題意識は本校の多くの先生方が共通して持っているものですので、きっと先生方も「やってみよう」と賛同してくださると思います。

実は本校は今年度、土曜日の学習講座で、受講する講座を教師が指定する方式から、生徒に選ばせる方式にしたことで、生徒の出席率が改善しました。夏季休業中の課題でも主体性を尊重することで、より大きな成果が挙げられることを期待しています。

森内先生プロフィール 教職歴9年。同校に赴任して10年目。進路指導部長。国語科。「生徒の未来と可能性を、生徒とともに探す」

学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約1000人／2018年度入試合格実績（現浪計）／国立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに38人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ173人が合格。

## 主体性を尊重する工夫はすべての生徒に行える

群馬県立高崎東高校 高橋真人 たかはし・まさと



昨年度までの勤務校では、生徒の進路は就職から進学まで多様でしたが、基礎学力が十分に身につけておらず、学習に対して自信のない生徒が少なくありませんでした。そのため、夏季休業中の課題では基礎・基本の問題を無理のない量で与え、達成感を味わわせることを重視していました。ただ、そうした生徒に対しても、夏季休業中だからできる活動はあります。志望校の過去の入試問題を見て、興味ある問題を選ばせ、なぜその大学にしたのかを聞くのも一案です。入試問題を解く力がまだない生徒にも、入試に目を向けさせることはできます。

今回の「夏期課題一覧」でも、就職希望の生徒の存在を意識して、「就職希望者向け問題」「進学希望者向け問題」とカテゴリーを設けることができます。その結果、すべての生徒が自分に必要な課題を選ぶことになり、取り組みの姿勢は主体的なものに変わっていくはずです。生徒の学力や希望進路にかかわらず、夏季休業中の課題を主体性の育成に生かすことができると思います。

**高橋先生プロフィール** 教職歴14年。同校に赴任して1年目。教務部。数学科。「物事に謙虚に、楽しく取り組む大切さを、自らの姿を通して生徒に教えるたい」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約200人/2018年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、茨城大、群馬大、富山大、高崎経済大などに16人が合格。私立大は、群馬医療福祉大、東海大、東洋大、文教大などに延べ110人が合格。

## 「学習の目的」を平素から明確に語る

埼玉県・私立武南中学校・高校 岡本眞一郎 おかもと・しんいちろう



「この学習でどんな力が身につくのか」は、夏季休業中に限らず、日々の授業でも生徒に考えさせることが大切です。そのためにはまず、生徒に対して「この学習の目的は何か」を明確に伝えていく必要があります。夏季休業中の課題を出す際も、それに取り組むことで生徒にどうなっていきたいと考えているのか、具体的な言葉で示した方が効果的です。そうでないと、生徒はやらされ感を抱えたまま漫然と取り組んでしまいます。

今回、私が特に感じたことは、「夏季休業中だからできる学習に学年団はもったいないわるべき」ということです。課題の総量調整はもちろん、選択肢の中から生徒自身に課題を選ばせることも取り組むべきでしょう。また、課題テストは夏季休業中の課題で生徒が期待通りの力を身につけたかを、検証できるものになっているかをチェックすることも大切です。そして、「夏期課題一覧」の名称も「夏の力こぶをつくらう!」などと、生徒も教師も夏季休業中の課題に楽しく取り組めるものにしたいですね。

**岡本先生プロフィール** 教職歴36年。同校に赴任して1年目。広報部。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して学び、生徒一人ひとりに成長や自立を実感させたい」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約400人/2018年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、筑波大、埼玉大、千葉大、東京外国語大、首都大学東京などに18人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大などに延べ646人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

### 指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。



# 授業と地域貢献活動をともに行う 学びで、問題解決能力を身につける

## 桜美林大学 サービスラーニングの推進



### カンボジアの孤児院で 運動会を企画しました

事前ヒアリングで、カンボジアの学校には体育の授業がないことが分かり、運動会を実施して体育教育を広げたいと考えました。活動を通して、将来の職業の目標も見えてきました。(三上さん)

### 本当の復興支援には何が 求められるか考えました

定期的に福島県田村市都路町を訪問し、被災地の復興支援を行うプロジェクトに参加しました。授業外でも集まりミーティングを重ね、活動内容を自分たちで決めていきました。(和田さん)



### ゼミ内外での活動発表で、 自分たちのプロジェクトを俯瞰できます

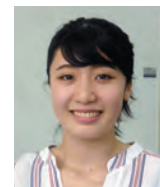
プロジェクトの活動内容は、週1回のゼミで発表し合います。さらに今年は、学内で行われた「リベラルアーツ・プレゼン・コンテスト」に参加し、英語で活動内容を発表しました。活動を振り返るよい機会になりました。(三上さん)



### 学生主体の地域貢献活動を 行う科目を設置

桜美林大学では、教育目標に「**学**而**事**人」(学んだことを人々や社会のために役立てる)を掲げており、教室での学び(ラーニング)と地域社会への貢献活動(サービス)をセットで行い、授業で得た知識を学外での体験に生かして問題解決を目指すサービスラーニングを推進している。そうした学びができるサービスラーニング科目は、2017年度に全学で68科目が設置されており、703人が履修した。

リベラルアーツ学群メディア(ジャーナリズム)専攻4年の三上彩乃さんは、3年次から専攻演習で



リベラルアーツ学群  
メディア(ジャーナリズム)  
専攻4年

#### 三上彩乃

みかみ・あやの  
青森県・私立弘前学院聖  
愛中学高校卒業。



リベラルアーツ学群  
国際協力専攻4年

#### 和田昌之

わだ・まさゆき  
東京都立富士森高校卒業。  
学内の学生団体でも地域  
貢献活動にかかわる。

サービスマーケティングを行う牧田ゼミ

に所属して国際協力について学んできた。授業では、国際協力に関する英語文献を分担して和訳し、概要をまとめて発表。その後、討論も行い、概念や理論を理解する。

「国際協力に関心のある学生が集まっていますが、意見を聞くと、自分とは異なる価値観や考え方があることに気づきました」（三上さん）

同ゼミでは、週1回の授業に加え、国際協力、復興支援など4つのプロジェクトの中から1つを選び、地域活動を行う。三上さんは、夏季休暇中にカンボジアの孤児院で10日間の活動を行うプロジェクトに参加。毎週の授業後もメンバーと集まって活動内容を練り、事前にカンボジアの歴史や文化、現地の言語を学んだ。

「活動目標として、最終日の運動会実施を掲げ、競技の練習を始めましたが、チームでの競技がうまくいきませんでした。それは、協調性が育まれていないだけでなく、内戦で民族同士が対立していた過去の影響もあることを学びました。そこで、仲間と話し合い、競技を教えるだけでなく、仲間とスポーツを行う楽しさを感じてもらうことを重視した活

動に修正しました」（三上さん）

## 地域社会の課題に取り組み問題解決能力を身につける

同じく牧田ゼミに参加したりペラルアーツ学群国際協力専攻4年の和田昌之さんは、福島県田村市都路町で、月1回ほど訪問する震災復興支援のプロジェクトにかかわった。

「活動目標を決める際、子ども向け支援と高齢者向け支援、どちらを行うかで意見が分かれ、チームで動く難しさを実感しました。反対意見にも耳を傾け、両方の支援活動を実施しました」（和田さん）

和田さんが特に難しいと感じたのはニーズの把握だという。

「ゼミでは、理論や事例を学び、張り切って現地に行きました。けれども、住民の方にいきなり『支援をしたい』と言うのではなく、世間話などをして、信頼関係を築くことが地域活動では重要だと学びました」

「教室での学び」と「地域社会への貢献活動」をともに行うことで、授業で学んだ知識を深め、地域社会の問題を発見し、解決する能力やコミュニケーション力、リーダーシップを身につけていくことができる。

## 地域社会での体験を学びや進路に生かす

学生はこうした過程を通じて、自らの学びを深め、将来のキャリアを模索していく。

「農家の方から『今も風評被害で苦しいでいる』と聞きましたが、自分には何ができるのか、手立てが浮かびませんでした。ただ、自分のできることを一歩でも進めようと、私たちは、通常は3年生だけで行うゼミのプロジェクト活動を4年次も継続し、都路町で町おこしイベントをすることにしています」（和田さん）

三上さんはカンボジアでの活動後、支援を継続できないジレンマに悩んだという。

「別れ際に子どもたちが泣いているのを見て、自分たちは子どもたちに一時的に悲しい思いをさせているだけではないのかと思い、継続的な支援について考えさせられました。活動はしっかりと後輩に継承し、私は目標として明確になった保育士を目指して勉強します。まずは日本で経験を積み、将来的には発展途上で保育士として、子どもたちの支援にかかわりたいです」

## 大学の思い

### 地域社会への貢献活動が学生の汎用的能力を伸ばす



基盤教育インスティテュート  
サービスマーケティング  
センター長  
牧田東一  
まさた・とういち

本学では2011年度に「サービスマーケティングセンター」を設置し、13年度から全学にサービスマーケティング科目を開設しました。アメリカの大学では全学生に履修させる場合も多いですが、日本では本学のように全学的に実施する大学は少ないと言えます。

私たちが期待しているのは、サービスマーケティングの過程を通して、自ら問題を発見し、それを解決することができる能力を身につけることです。将来の予想が困難な社会において、教科書で学んだ知識だけではなく、自ら考え、行動していく力が重要です。教室の学びを地域社会への貢献に生かしていくプロセスの中で、コミュニケーション力や協調性などの汎用的能力も獲得していきます。

そうした能力を発揮する場として、私のゼミ生は学内の「リベラルアーツ・プレゼン・コンテスト」に参加しました。活動をゼミ以外の人たちに向け、英語でプレゼンテーションする機会を得て、大きく成長しました。どのような進路に進んだとしても生かせるスキルを、学生たちは獲得したと思います。



# 依頼者が求めることをチームで考え、 解決策を提示する力を育成する

## 金沢工業大学 プロジェクトデザイン教育



### 1年次から自分たちでテーマを考え、 問題解決に挑みます

テーマは自分たちで決められるため、学びを自分たちでつくる面白さを感じました。また、自分の意見を持ち、他者と意見交換することが大事だと気づきました。(横川さん)

### 調査手法も自ら考え、 社会で求められる 問題解決を体験します

自転車専用通行帯をどこに設置すれば事故が防止できるかチームで現地の歩行・走行検分を行いました。依頼者である地元市役所に評価されるデータの提示を考えました。(横川さん)



### 自分の考えを伝える表現力が身につきました

どのように表現や構成を工夫すると、より伝わりやすいかを試行錯誤して、ポスターセッション用の発表資料を作成。市役所担当者からも、「危険な場所が分かりやすい」と高く評価していただきました。(米谷さん)



1年次は、プロジェクト活動に必要な考え方や技法を学ぶ。前期の「プロジェクトデザイン入門」では、解決策の検証・評価に必要な実践・調査の知識や技法を習得する。情報フロンティア学部メディア情報学科

4年間通して全学で展開する「プロジェクトデザイン教育」は、金沢工業大学の中核となる教育プログラムだ。技術者に必要な、依頼者のニーズを的確につかんで解決策を具体化させるといふプロセスにチームで取り組ませ、問題解決能力やコミュニケーション力、プレゼンテーション力などの育成をねらっている。

### 社会での問題解決能力を育む 4年間の体系的プログラム



情報フロンティア学部  
メディア情報学科3年  
**横川 輝**  
よこがわ・あきら  
福井県立羽水高校卒業。  
ゲーム関連の進路を希望。



情報フロンティア学部  
メディア情報学科3年  
**米谷 友文**  
よねや・ともふみ  
茨城県立日立北高校卒業。  
専攻とする音声の研究を  
生かした就職を志望。

3年の横川輝<sup>あきつ</sup>さんと米谷友文さんが所属したチームは、「ケミカルライト（\*1）の発光時間を長くする」というテーマを設定した。自分たちでテーマを決めて、自由に研究を進める経験は初めてのため、試行錯誤の連続だったと横川さんは話す。

「文献やインターネットで調べたところ、化学反応を遅らせるには冷却が効果的と分かりました。ただし、実験では結果にバラつきが大きく、自分たちだけで調査手法を考える難しさを実感しました」

実験を繰り返す中、氷水で冷却すれば発光時間を長くできることが分かり、その成果や考察を、最終授業のポスターセッションで発表した。

後期の「プロジェクトデザインI」では、解決策を文献調査から探り、提案する手法を具体的に学ぶ。

## 2年次は専門性を生かした 実社会の問題に取り組み

2年次は、各学科の専門分野に関連する問題に取り組む。前期の「プロジェクトデザインII」では、自分たちで問題を設定し、解決に向けたアイデアを考え、後期の「プロジェクトデザイン実践」で実行に移す。

専門分野にかかわるテーマを独自に設定するチームもあれば、大学のある金沢市と野々<sup>のの</sup>市市から提示されたテーマ群から選定し、専門性を生かすチームもある。横川さんと米谷さんのチームは、野々市市が出したテーマの一つ、自転車ネットワーク（\*2）に取り組んだ。

「私たちは情報分野を学んでいるので、データを分析し、自転車専用通行帯を優先して設置すべき場所を提案しようと考えました。地域の警察署を訪れて自転車がかかわる人身事故の情報を集めたり、学生に自転車を運転中に危険を感じた場所アンケートで調査したりしてデータを収集しました。それらの分析を基に、特に危険なエリア3か所を地図に示し、市役所の担当課にプレゼンテーションを行いました」（米谷さん）

詳細なデータ分析を基にした提案は高く評価され、市から継続調査の依頼があり、今度は自転車などで大学周辺の危険度を現地調査した。

「現地では、電柱が通行の邪魔になるなど、様々な危険が具体的に見えてきました。データ分析だけでなく、自分の目で確かめることも重要だと感じました」（横川さん）

## チームでの協働を通して 主体的に動く大切さに気づく

そうした活動を通し、学生は社会で求められる汎用的な力に加え、主体的に動く大切さにも気づく。

「メンバーが積極的に各自の強みを生かし、役割分担をして取り組みました。私は人前での発表があまり得意ではないため、データ分析や資料作成で貢献できるように頑張りました」（米谷さん）

3年次は、プロジェクトデザイン教育の科目は設置されていないが、専門性を深め、4年次に取り組みたいテーマを設定。そうした学びを土台として、4年次の「プロジェクトデザインIII」では研究室に属し、決定したテーマで卒業研究に取り組む。年度末には公開発表審査会が行われ、4年生全員が学内外の人たちに向け卒業研究を発表する。こうした社会で求められる力を長期的に育成するプログラムの実践により、99%という高い就職率を誇っている。

「私は、ゲーム関連の職業に就くという希望を叶えるために必要な専門性を3年次に見つけて、深めたいと考えています」（横川さん）

## 大学の思い

### 社会の問題解決を体験して 苦勞する経験が財産になる



基礎教育部  
教授  
島谷 祐司  
しまたに・ゆうじ

社会で直面する問題には、決まった解がありません。さらに、予算や期限などの制約を踏まえた成果を出すことが求められます。そうした問題解決を体験させ、社会で求められる汎用的な力を育てることが「プロジェクトデザイン教育」のねらいです。

依頼者を意識した問題解決では、いかに相手の要望に応えるかを真剣に考えるため、問題発見・解決能力に加え、企画力や提案力が伸びていきます。さらに、3年次以降、専門分野を深めていくと、専門性の高いアイデアを創出するクリエイターへと成長します。横川さんと米谷さんは、地元自治体から高く評価されるという成功体験をしましたが、失敗体験にも価値があります。大事なものは、苦勞しながらチームで依頼者の要望に応える問題解決に取り組むこと、その経験は大きな財産となります。

「プロジェクトデザイン教育」は全学共通プログラムでしたが、今年度より1年次から専門性を反映させた内容に改定しました。今後、より専門性の高い問題解決能力を育てていきます。

\* 1 コンサートなどで使われる化学発光による照明器具。

\* 2 自転車専用道路を用いて歩行者・自転車・自動車が安全に移動できるようにする都市計画。

## これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 山口 覚

行政、教育機関、地域、企業など、様々な場で対話を促進し、構成員が主体的に課題に取り組む集団づくりを支援するファシリテーターとして活躍。津屋崎ランチ LLP 代表 / LOCAL&DESIGN (株) 代表取締役。



# 会議・研修の司会・進行役の先生方の質問に答えます！

経験や年齢にとらわれず、自由に意見を述べ合うことで、お互いの教育観や指導観を深め、よりよい学校の姿を追究する会議・研修のあり方、つくり方を考えてきた本コーナー。前号に続いて、読者の先生方から寄せられたこれからの会議・研修をつくっていく上での疑問や悩みについて、答えていきます。2回目の今号では、「思考を深める技術」として、2017年8月号の本コーナー P.42～43 で紹介した内容に関連する

先生方の疑問・悩みについて、監修者の山口覚さんにお答えいただきます。

今回取り上げる内容は、「自由な意見交換を目指す」という段階から一歩進み、出てきた意見を踏まえて「学校全体として目指す方向性を考える」「新しい学校像を模索する」という高次の取り組みになります。「深い思考」を促す働きかけは、会議・研修はもちろん、授業づくりにおいても役立つでしょう。

Q<sub>1</sub>

### 自分の立場での発言ばかりで、学校全体という視点がない



質問者 1

「総合的な学習の時間」での探究活動のあり方について学年を超えて話し合うと、自分の教科、学年の都合を優先する発言が目立ち、結果的に「そんなことはできない」と、新しい取り組みへの不安や不満の声ばかりになってしまいます。

A<sub>1</sub>

### ポジショントークから抜け出し、他者目線で考えられる進进行を



自分の立場から、自分にとって有利な発言をすることを「ポジショントーク」と言います。物事を考える時に他者の立場を意識しようとしなないのは、相手の事情を実は分かっているのに意図的に無視している場合と、そもそも自分のことにしか考えが及んでいない場合の2つのケースがあります。特に、後者の状態の人が他者目線に立つのは簡単ではありません。ポジショントークをしていることを自覚させるには、「いろいろな考えがこの学校の

中にある」ことへの気づきを積み重ねていくことが重要です。ポジショントークに陥りがちな人を少しずつ変えていくために、司会・進行役の先生は、「〇〇の立場だったら、どう考えるでしょうか？」と具体的に全員で考えてみます。それを繰り返すことで、徐々に他者目線も含めた発言ができる人が現れます。他者の気持ちを理解する手法である「ロールプレイング」を取り入れ、擬似的に別の立場になって話し合う時間を会議・研修に意図的に組み込んでみるのもよいでしょう。

## Q<sub>2</sub>

### 議論が一般論で本音が聞かれず、具体的な行動につながらない



質問者 2

これからの教科指導のあり方について話し合うと、「こうあるべき」という理想は語られるのですが、今までそれをしてこなかった理由や本音に向き合ってもらえず、そのため、話し合ったことがその後の行動に結びついていきません。

## A<sub>2</sub>

### 「本当にそれでよいのですか？」と丁寧に問いかけ続ける



過去の失敗や本音を語るのは決して容易なことではありません。しかし、過去の失敗や自分の中の否定的な気持ちに向き合えた時、人はその後の行動を大きく変えていききっかけを得ます。会議・研修を通して何かを学び、成長したいと思っている参加者の変化・変容を促すために、司会・進行役の

先生には、参加者から出てきた意見に対して「本当にそれでよいのでしょうか」「明日からできそうでしょうか」「明日からできないかもしれないと思うのなら、それはなぜなのでしょうか」とさらにもう一步、考えを深めるような問いを投げかけていくことが求められます。

### 「本音」「失敗経験」が語りやすくなる 雰囲気づくり方

「本音」や「失敗経験」を他者に語るためには、参加者同士の関係をよりよい状態にしておくことが必要です。会議・研修の場で取り組めるペアトークの方法をご紹介します。

会議・研修の場にいる全員で話し合う前に、まず、ペアでの話し合いを行います。世代・年齢の異なるペアをつくり、年長者から「教師としてのこれまでの経験の中で、最もうれしかったこと」を2～3分間で語ってもらいます。年長者が自分の「成功」を語り、気持ちが前向きになった後で、今度は年齢の若い人が同様に「教師としてのこれまでの経験の中で（教師歴が浅い場合は学生時代を含んでもよい）、最もうれしかったこと」を2～3分間で話します。年長者は自分が十分に語った後ですから、後輩の言葉にじっくり耳を傾けることができますし、若手は先輩に聞いてもらったことで安心感を得ます。そのようにしてから、年長者から先に「本音」「失敗経験」を話すように促してはいかがでしょうか。

## Q<sub>3</sub>

### 話を早々に切り上げてしまい、雑談を始めてしまう



質問者 3

グループで話し合うと、一部のベテラン教師が「大体こんな結論でいいだろう」と話をまとめてしまい、雑談を始めることがあります。せっかくの会議なのでから、「ほかの考え方があるかも」と粘り強く話し合っしてほしいのですが……。

## A<sub>3</sub>

### 「本当にそうか？」と何度も自分に問うことの価値を習慣づける



日本のある企業は、『「なぜ？」と5回問う』をモットーにしているそうです。その背景には、「自分たちは常に正解を知っているわけではない」という前提があると私は思います。対話的な会議・研修をつくる

ためには、司会・進行役の先生が、参加者の様子を見ながら「今、たどり着いた場所のその先に、さらに別の世界があるかもしれません」と、「なぜ?」「本当に?」「ほかには?」と語り合いを続けるように促していただきたいと思います。

### 貴校の会議・研修づくりを お手伝いします!

VIEW21 編集部が本コーナーの監修者とともに、貴校の会議・研修づくりをお手伝いいたします(会議・研修の様子は、本誌誌面で紹介させていただく場合があります)。現状の会議・研修のあり方に課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、下記の e-mail アドレスにご送信ください。  
※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認をお願いいたします

①学校名・お名前 ②分掌・ご教職歴 ③改善したい会議・研修の内容(目的・時期) ④会議・研修に対する課題意識、改善要望

✉ view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

※ご応募いただいた学校すべてを必ずお手伝いできるとは限りません。

〈個人情報の取り扱いについて〉この「会議・研修のあり方、づくり方」の会議・研修づくりの募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等に個人情報取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO (個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご返信ください。

## 「地方創生イノベーションスクール2030 第2期 (ISN2.0) キックオフ シンポジウム」開催

# 第1期の成果と課題を共有し、地域や国を超えた探究学習の深化を図る

東日本大震災の発生から7年目となる2018年3月11日、東京大学情報学環・福武ホールにて、OECD日本イノベーション教育ネットワーク主催による、「地方創生イノベーションスクール2030 第2期 (ISN2.0)」に向けたシンポジウムが開かれた。第1期の活動に参加した高校生や活動をサポートした研究者から第1期の活動報告と第2期に向けた展望が語られたほか、参加者全員によるディスカッションが行われ、会場全体が主体的・対話的な学びの場となった。

### 高校生らが発表し、第1期の成果と第2期の展望を共有

「地方創生イノベーションスクール2030」(以下、ISN)は、OECD日本イノベーション教育ネットワーク(\*1)の主要事業の一つで、2030年の社会に向けた地域課題に、日本の中高生が海外の中高生や自治体・大学などと協働して取り組む探究学習だ。これからの社会で求められる資質・能力を育成するための新しい学びのモデルを研究開発し、そのフレームワークづくりに貢献することがISNの大きな目的の一つである。11年に発足した震災復興教育プロジェクト「OECD東北スクール」の後継事業として、15年4月に始まった第1期では、東北・福井・和歌山・広島・隠岐島前・高専の6つのクラスターが、それぞれ地域課題や地方創生、人材育成などをテーマに探究学習に取り組み、参加校同士やクラスター間で情報交換や成果の共有を図り、探究学習のネットワークを構築してきた。さらに、海外8か国のパートナースクールとも連携。互いに訪問し合ったり、ICTを活用したりして交流し、国際シンポジウム

の開催によって、国際協働による探究学習のあり方も見いだしてきた。約2年間の第1期の活動を第2期

でさらに発展させるため、シンポジウムでは、ISN共同代表を務める福島大学の三浦浩喜副学長の挨拶後、生徒や学生から第1期の振り返りと第2期に向けた提言がなされた(図1)。

### 泣きながらも意見を集約し、共同宣言を完成させた達成感

最初の発表者、和歌山クラスターに参加した和歌山県立日高高校2年の山本詩央理さんは、17年8月、東京で開催された「生徒国際イノベーションフォーラム2017」での経験について語った(写真1)。

同フォーラムは第1期の集大成となる国際会議で、海外パートナースクールの生徒60人を含む約220人の中高生が集まり、各クラスターの活動報告、意見交換を行った。その際、和歌山クラスターは、ISNの取り組みとフォーラムを今後の活動に結びつける「生徒共同宣言」をまとめる大役を担った。事前に原案を作成し、各クラスターから意見を募ったが、多種多様な意見を集約するに

\*1 国際連携で教育研究を行う産学コンソーシアム。本誌2015年6月号P.46～49にて、発足記念シンポジウムをレポートしています。

## 図1 シンポジウム プログラム

### 開会挨拶

ISN共同代表、福島大学理事・副学長 三浦浩喜氏

### ISN第1期の経験とISN第2期に向けての提言

和歌山クラスター 和歌山県立日高高校2年 山本詩央理さん  
和歌山県立田辺高校3年 宮崎理央さん  
和歌山県立田辺高校教諭 和田充可氏

和歌山クラスターローカルリサーチャー  
関西学院大学高等教育推進センター講師 時任隼平氏  
エンパワーメントパートナー  
東北スクールOG/上智大学2年 草野みらいさん

### ISN第2期のねらいと期待される成果

ISN研究代表、東京大学教授 秋田喜代美氏

### 講演1 OECD2030年の教育プロジェクト

未来志向のカリキュラムデザイン OECD 諸国と考える

OECD教育スキル局初等中等学校教育課シニア政策アナリスト 田熊美保氏

### 講演2 国際的なコンテキストから見る日本の教育課程

文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長 白井俊氏

### OECD Education 2030 プロジェクトワーク (ディスカッション)

### 開会挨拶

ISN共同代表、東京大学公共政策大学院教授 鈴木寛氏

**写真1** 「生徒国際イノベーションフォーラム2017」で発表された「生徒共同宣言」の作成に携わった和歌山県立日高高校の山本さんは、様々な人の思いを1つの文章にまとめるのは苦しかったが、大きな経験になったと語った。

**写真2** 和歌山クラスターでは、「和歌山発地方創生」を共通テーマに、県立高校5校が各校独自の課題を掲げて、探究学習を行った。田辺高校の宮崎さんは、地域の名所・熊野の魅力を発信する活動を行う中で得た自身の成長と今後の課題を語った。

は想像以上の苦労があり、涙を流すこともあったという。そうした中で、仲間と励まし合い、担当教師からアドバイスを得ながら何度も書き直し、フォーラム当日に出た意見も集約して宣言文を完成させた。その後、フランス・パリにあるOECD本部を訪問し、「生徒共同宣言」を中心に活動報告を行った。それらの経験を踏まえて、山本さんは次のように語った。

「『生徒共同宣言』の作成やパリ訪問では、今まで感じたことのないような達成感を得るとともに、多くの課題も見えてきました。海外の生徒との討論では英語力不足から自分の考えを伝えられないもどかしさやふがいなさを味わい、高校生でも母語並みに英語を話せる必要性を痛感しました。また、多様な人たちと話し合う中で、2030年の世界では様々な課題を自分事として捉え、地域や世界の人々と熟議し、ともに行動に移す力が必要だと感じました。そのため、人と人をつなぐ力、異なる

意見をまとめる力、協働して課題に取り組む力を高めたいと考えました」そして、第2期への提言として、「『生徒共同宣言』に込められた思いを広げ、多くの人々が目標に向かっていくことに価値があります。生徒中心の学びの場を多く持ち、挑戦し、失敗と成功を繰り返しながら、ともに変革していきましょう。私たちは単なる傍観者ではありません。世界をつくっていく主人公なのです」と会場に呼びかけた。

## 葛藤しながらも協働した経験を次に生かしたい

和歌山県立田辺高校3年の宮崎理央さんは、和歌山クラスターでの活動で経験した葛藤について語った(写真2)。同校では、「熊野の地から世界を見つめる」をテーマに、地域住民と地域在住の外国人がともに楽しめる交流イベントの開催、外国人観光客へのインタビューなどを行った。活動中は、メンバー間の活動への意識の差から意思疎通がうまく図れなかったり、熱心に取り組む生徒が自身の努力が正当に評価されていないといった不満を抱えたりすることもあった。また、参加校の所在地が互いに遠く離れているため、情報を共有する難しさもあったという。

今後はOGとして活動にかかわるといふ宮崎さんは、自身の経験を踏まえ、第2期への期待をこう語った。「第2期の活動においても、たくさん葛藤が生まれるでしょう。そうした中でメンバー全員が本気でかわっていくためには、周囲の大人や大学生のサポートが必要です。私はこの活動を通して培った、人を巻き込む力を発揮し、メンバー同士がしつ

\*プロフィールは2018年3月時点のものです

かり意思疎通を図れるよう、サポートをしていきたいと思えます」

## 第2期での新たな挑戦は協働活動と評価法の開発

次に、ISN研究代表の秋田喜代美東京大学教授が、第2期での新しい挑戦について述べた。

ISNの目的の1つには、新しい地域・国・世界を築くイノベーターを育成するカリキュラムのあり方の探究が掲げられている。その実現に向け、第2期では、「生徒共同宣言」の実現、各教科の「見方・考え方」の育成を通じた創造性を高める方策の具体化、生徒・教師・大学生・研究者や地域を超えた国際ネットワークの構築などに取り組んでいくという。その際に大切な視点として、地域や異年齢の協働活動を挙げた。

『生徒国際イノベーションフォーラム2017』に参加した中学3年生が、その活動報告会で後輩に対して、『自分たちの課題研究には、他者の幸せのためという視点がなかった。私たちが高校生を見習い、社会貢献を意識した探究活動を目指そう』と述べました。それは、学校種を超え

た交流だったからこそ生まれた気づきだと言えます。校内の活動だけでは得られない体験がISNにはあり、それをもっと推進していくべきです」

今後は、共通の課題を地域間で共有し、ICTも活用しながら、地域や学校種を超えて協働で探究する方法を模索していく。

評価法のさらなる開発も、重要な課題だ。秋田教授は、東北クラスターにおけるルーブリックの活用を例に挙げ、「事前・事後の追跡調査に加えて、生徒自身が学びの変化を認識できるような評価法を考えていきたい」と展望を語った。

## OECDが重視する「エイジエンシー」の概念

続いて、OECD、並びに文部科学省の担当官による講演が行われた。

OECDのシニア政策アナリスト・田熊美保氏からは、未来志向のカリキュラムデザインを考えるプロジェクト「OECDラーニングフレームワーク2030」が生まれた背景と、OECDが重視するキー・コンセプトが紹介された。

プロジェクトの背景にあるのは、

11〜15年に起きた世界の変化だ。急速な技術革新の影響で、今後の社会で求められるスキルが大きく変わると予想されている。簡単な作業やルーティン化できるものは自動化・外注化される一方で、創造性が必要な仕事や対人的・分析的な仕事は人が行うものとして残るとみられている。そして、環境問題や少子高齢化、所得格差、女性の社会参画などの課題も山積している。そのように社会が複雑化する中、学校で育成を目指す資質・能力とはどのようなものか、OECDキー・コンピテンシーの再定義がプロジェクトのねらいだ。

同時に、OECDがカリキュラム分析を始めた背景の1つに、東北スクールにおけるカリキュラム実践、並びに日本の教育課程改革の事例がOECDの政策委員会で紹介されたことが挙げられる。東北スクールが各国の共感を得た理由は、テーマに普遍性があったこと、何よりも学校の意義を再確認できたことだと、

図2 OECD ラーニングフレームワーク 2030



\* OECDのホームページ「The OECD Learning Compass」をそのまま掲載

田熊氏は語る。

「東日本大震災後、子どもたちの心が上向ききつかけとなったのは、学校が再開され、友だちの顔を見たことでした。学校は勉強をするだけの場所ではなく、人間同士のコミュニケーションを築く場所であることが再認識されました。折しも、各国ではカ

リキュラム改革と、少子化による学校の統廃合が進められていました。各国共通の課題であるなら、ともに学びたいという声が高まり、OECDを中心としたカリキュラム分析が始まったのです」

OECDは、元々、経済成長を示す指標として仕事・収入・住まいなどに関するデータを中心に収集していたが、OECD自体が「成長の再定義」をし、「経済成長から包括的成長」を目指し、ウェル・ビーイング・フレームワークを打ち出した。現在、経済成長以外の指標として、ワーク・ライフ・バランスやセキュリティ、コミュニティ参画、幸福度など11の指標でウェル・ビーイング（よりよい社会指標）を測っている。それらの指標に表されるよりよい社会を子どもたちが新たに創り出すために必要なコンピテンシーを明確にしよ」と、「OECDラーニングフレームワーク2030」(図2)を考案中だ。そして、その中でも重視するのが、「エージェンシー」である。それは、他者が決めたことに従うのではなく、自らの意志で行動することを示した概念だ。よりよい社会を築くための変化を起こす主体といった意味だが、



写真3 日頃から授業などでグループワークを実践しているからか、プロジェクトワークでは、課題が示されると、近くの席の者同士でさっと輪になり、話し合いを始めていた。

原語（英語）のコンセプト自体、時代とともに、また地域性も加わり、その解釈が変化しているため、現在のところ適切な日本語はないという。そのコンセプトに沿った学習活動や評価のあり方を、現在OECDで分析しているところだ。

文部科学省初等中等教育局の白井俊氏からは、「国際的なコンテクトから見る日本の教育課程」と題した講演が行われた。教育の国際動向とPISAショック以降の日本の学習指導要領改訂の歴史、次期学習指導要領で明確化された「資質・能力」と諸外国のコンピテンシーとの比較、アクティブ・ラーニングの重要性などが語られた(本誌P.4〜5参照)。

## 「エージェンシー」とは何か 参加者全員が語り合う

講演後は、参加者全員でディスカッションを行った。テーマは、田熊氏の講演で語られた「エージェンシー」と、次期学習指導要領で重視されている「アクティブ・ラーニング」をそれぞれ適切な日本語に訳すことだ。参加者約90人が4〜5人ずつのグループに分かれて話し合った。

参加者はOECDのラーニングフレームワークと日本の次期学習指導要領を見比べながら、「エージェンシーはもつと幅広い概念ではないか」「階層的に積み上げていくイメージでアイデアを並べてみよう」などと、



写真4 「エージェンシー」の訳語は、黄色の付箋に書き、模造紙に貼っていく。それぞれの解釈を共有することで、「エージェンシー」への理解が深まっていた。

積極的に意見を述べ合っていた(写真3)。自身の指導経験や見聞を踏まえて活発に語り合い、色分けした付箋にアイデアを書いて、模造紙に貼っていた(写真4)。

約30分間の活動後、付箋が貼られた模造紙を俯瞰して、総括が行われた。「エージェンシー」では、「変わる」「主人公」「巻き込む」「発信する」「共有する」といった言葉が見られ、おむね「新しい価値を創造する」というイメージで共通していた。一方、「アクティブ・ラーニング」は、「頭をぐるぐる回転させながら学ぶ」「対話」「生きた学び」「社会とのつながり」といった訳語が出されていた。

最後に、ISN共同代表の鈴木寛東京大学教授が次のように語り、シンポジウムは閉幕した。

「ISNの取り組みは、日本国内だけで完結するものではありません。日本から世界へ発信し、2030年には世界中のムーブメントになっていることを願っています。そのためには、我々研究者や現場の先生方自身がアクティブ・ラーナーとなってトライ・アンド・エラーを繰り返し、そこで得た経験や知恵を共有しながら困難を乗り越えていきましょう」

## 2018年4月号へのご意見

### 自校の実態に沿う授業改善を

「自ら考える力」をいかに培うかを「言語活動の充実」によって実現しようとしたこれまでの教育活動からすれば、次期学習指導要領では、「身につけさせたい資質・能力」を明確にし、何を、どのように教え、どんな力を身につけさせたいかが、はっきり打ち出されている点が分かりやすいと思う。とりわけ、主体的・対話的で深い学びによってそれを実現しようとする方向性は、具体的に理解しやすく、教育改善につながる内容だ。一方、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等は、本校のSGHの経験から言うと、例えば、ルーブリックはいくら優れたものでも他校のものをそのまま使うことはできず、自校の実態に沿うものをつくらなければならない。4月号の特集を読み、育成する生徒像をどう掲げるのか、そのための教師像はどうあるべきかについて、改めて突きつけられていると感じた。

福岡県・私立明治学園中学校・高校 左右田裕

### 他教科の指導の工夫も参考に研鑽を積みたい

4月号の「実践 アクティブ・ラーニング」で紹介された鹿児島県立鹿屋高校の中山育郎先生の記事について、私も似たような状況にあったので、とても共感した。私の担当教科は保健体育科であり、その指導はあまり誌面では取り上げられないが、アクティブ・ラーニングは「学びに向かう姿勢づくり」と捉えて、このコーナーも読みながら、他教科の観点・手法も取り入れられるように研鑽を積みたい。

北海道旭川東高校 中川清文

### 「変化をすぐに求めるな」を心にとめて指導を

4月号の「教師を育てた言葉たち」で紹介された「変化をすぐに求めるな」が、心に深く刺さった。私自身、生徒にすぐに変化や違いを求める傾向があるからだ。その一方で、旧体制を維持しようとする自分にも気づいた。今、学級担任をしているが、この言葉を心にとめて、授業でも学級運営でも生徒と向き合っていきたい。

島根県・私立開星高校 豊田啓司

## 教育ちよこっトーク



### テーマ 夏休みに、生徒に 読んでほしい一冊

・夏目漱石著『ころ』(新潮社)。何度読んでも新たな気づきがある。滋賀県  
・新井紀子著『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』(東洋経済新報社)。自分が置かれる社会がどうなるか、生徒にぜひ知ってほしい。青森県

・トーン・テレヘン著『ハリネズミの願い』(新潮社)。人というものがよく分かる、思春期にもってこいの本。愛知県  
・村山斉著『宇宙は何でできているのか』(幻冬舎)。理系でなくても気軽に読め、視野が広がる一冊。栃木県

## 自分を変えた言葉 を募集しています!

「教師を育てた言葉たち」(巻末)のコーナーでは、取材にご協力いただける先生を募集しています。「あの一言で指導観が変わった」「自分を成長させてくれた」という言葉と、それにまつわるエピソードをお待ちしています。

〈個人情報の取扱いについて〉をご確認いただき、  
必要事項①～④をご記入の上、  
下記のe-mailアドレスにご送信ください

- ①学校名・お名前 ②分掌・ご教職歴 ③紹介したい言葉  
④エピソード(どんな時に言われた or 出合った、それによって自分がどう変わったのかなど)

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「教師を育てた言葉たち」の言葉募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じる場合があります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時)にて承ります。  
(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者)  
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

## 編集後記

4月から『VIEW21』の担当となりました西村です。今号では、1週間で3つの高校を訪問するなど、北は北海道から南は愛媛まで6校を取材しました。ご協力いただいた先生方や生徒の皆様へ深く感謝申し上げます。特に印象深かった取材は、北海道倶知安高校です。授業後にインタビューをした3年生から、授業で高まった主体性が、実生活や実社会でも役立つ資質・能力であると実感しているという話を聞き、授業は人を成長させる場であると改めて感じました。生徒たちは、来年の春の進路実現に向けて、それぞれ頑張ることと思います。そうした中でも主体性をぜひ伸ばし続けてほしいと思いました。(西村)

VIEW21 高校版 2018 8 月号

次号は 8月20日発行(予定)  
『VIEW21』高校版は年6回の発行です

## 教師を育てた 言葉たち

No.008

愛媛県立松山北高校

**大谷修一先生**

おおたに・しゅういち

◎教職歴 33 年。同校に赴任して 6 年目。  
進路指導主事。理科。

**愛媛県立松山北高校** 全日制／普通科／共学  
／1 学年約 360 人／2018 年度入試合格実績  
(現役のみ)：国立大は、千葉大、東京学  
芸大、名古屋大、金沢大、愛媛大、熊本大など  
に 178 人が合格。私立大は、明治大、立命館大、  
同志社大、松山大などに延べ 689 人が合格。



**新** 採で赴任した進学校に 3 年間勤務した後、実業高校に異動しました。教師になって 4 年目、担任として、また教務担当として、少し先のことを見通せるようになり、「もっとよい声かけ、指導ができるようになりたい」「先生方が負担を感じず、もっと動きやすい時間割をつくれるようになりたい」と向上心、欲が出てきたことを自覚していました。一方で、実業高校の生徒への指導、そして「女子クラス」の担任と、初めてのことも重なり、「今、この場面での声かけ、指導は、本当にこれでよいのだろうか」と悩んでしまうことも多くありました。当時の私は物事を一生懸命に考えすぎていて、「石橋を何度もたたいてなかなか渡ろうとしない状態」になっていたのです。そして、生徒やほかの先生からは「静かな先生」と思われていたはずです。

異動先では化学の教師は私だけでしたので、化学準備室では大抵 1 人で過ごしていました。そんな私を見て、赴任したばかりで寂しいのではないかと思ってくださったのでしょうか、隣の地歴・公民準備室の先生方が「こっこの部屋においでよ」「お茶を飲みながら話そうよ」と声をかけてくださるようになりました。教科も、年齢も違うため、最初は遠慮していましたが、ある時ふと、話をしに行ってみようと思いつき、先輩先生たちの元に足を運ぶようになりました。

**先** 輩先生たちは、前任校との違いに戸惑い、悩みや不安を抱える私をいつも笑顔で迎え、励ましてくれました。あれこれとアドバイスをすると

いうよりも、私の話にしっかりと耳を傾けてくださり、「大谷先生の趣味は『悩むこと』だからなあ！」と笑い、いつの間にか私も一緒に笑顔になっていました。そんな中で 1 人の先輩がかけてくださったのが「**迷った時は GO!** だよ」という言葉でした。動き始めてからでも修正はできる。迷っているという表情を見せずに元気に振る舞うことで生徒の元気を引き出せる……先輩先生たちはいろいろなことを教えてくださいました。

「迷った時は GO!」は自分自身の行動だけでなく、生徒への声かけも変えていきました。進学希望者の多い学校に異動し、出願校決定のための面談が多くなると、生徒の背中を押す際にこの言葉をよく使うようになりました。もちろん、選んだ道を元気に進んでも、望んだ通りの結果にならないこともあります。そんな時も私は、「よし、次と一緒に考えよう！反省はしていいけれど、後悔をする時間はないよ！」と常に前を向こう、自分が決めた道を最後まで一緒に進んでいこうと声をかけます。それが、生徒の背中を押した教師としての責任だと思っていますし、「成功のために、次はどうすればよいか」を考え続けている限り、失敗ではないと思っています。

**以** 前、高校教師の研修会に参加した時、ある先生が「元気な教師から元気な生徒が育つ」と話されるのを聞き、私はうれしくなって「そうそう！迷った時は GO! なのだから！」とニヤニヤしていました。25 年以上前に思いがけず出合った言葉、考え方は、今も私の軸になっています。

# 大学入学後も 使える英語力を。

中学生・高校生対象

スコア型英語4技能検定

# GTEC

継続的に英語力の伸びが測定できる

GTECは、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を測るスコア型英語4技能検定です。多くの大学・短期大学の入試でGTECのオフィシャルスコアが活用されています。また、日常生活で使える英語の育成を目指すテスト設計になっており、大学入試に必要な英語力だけでなく、大学入学後も使える英語力を育みます。

2018年検定日



[www.benesse.co.jp/gtec/](http://www.benesse.co.jp/gtec/)

GTEC

検索

## VIEW21

ビュー21 高校版 Volume2 2018年6月号  
2018年6月20日発行 / 通巻第370号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング12階  
©Benesse Corporation 2018

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17